

---

# 仮面ライダーW Rの脅威/帰って来てくれ仮面ライダー

イマジンカイザー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーW Rの脅威／帰って来てくれ仮面ライダー

### 【Nコード】

N4177N

### 【作者名】

イマジンカイザー

### 【あらすじ】

フィリップが地球の記憶の中に消えてから半年後の2011年2月某日、かつて翔太郎たちが逮捕した犯人たちが刑務所から脱獄。それと時を同じくし、風都に正体不明のドーパントが出現。”9つの世界の仮面ライダー”に似たドーパントたちの企みとは何か？そして、その背後で暗躍する謎の男の目的は？

## はじめに

この作品は『仮面ライダーW』における、  
本編第48話「残されたUノ永遠の相棒」から、  
最終話「永遠のEノこの街に正義の花束を」の間の空白の時間を使  
った二次創作作品です。

最終回が放送されていない段階から執筆を開始した関係で、  
いくつかW本編と噛み合わない部分が出ています。

ゆえに、純粋な最終回の補完としてではなく、  
一本の『仮面ライダーW二次創作』の小説としてお読みください。

本編未登場のライダーが数体登場します。

以上を確認した上で、本小説をお楽しみくださいませ。

prologue 1：Aの来訪／そして半年後の鳴海探偵事務所（前書き）

「——大丈夫。これを閉じて僕たちは永遠に相棒だ。この地球がなくなるに限り」

——ちがう。違うんだフィリップ。俺は……俺は……。

「——泣いているのかい？翔太郎」  
「馬鹿……言うな。泣いて……なんか」

——そうだ。俺は泣いてなんかいない。  
フィリップ。お前に比べりゃ、俺の涙なんて……。

——別れたくねえよ。俺たちはずっと、今までもこれからずっと、

二人で一人の探偵で、仮面ライダーだったじゃねえか。  
でも、やらなきゃならないんだよな？そうじゃなきゃいけないんだよな？

一人空しく消えていくよりは、ずっと、ずっといいんだよな？フィリップ。

「閉じる……ぜ」  
「ああ」

——俺は、ベルトに装着されたエクストリームメモリのバックルを閉じ、  
それを一気に引き抜いた。

相棒が……フィリップが大粒の涙を流しながら笑顔で消えてゆく。

声を上げ、消えゆくあいつの腕を掴もうと自分の手を伸ばした。

だが、声を上げるよりも早く、腕を掴むよりも早く、

フィリップはデータの塊となって地球の記憶の中へと姿を消した。

## prologue 1：Aの来訪／そして半年後の鳴海探偵事務所

「ん……おお、あぁっ」

——気がつくと俺は事務所の机の上で、

書きかけの報告書とタイプライターを枕に眠っていた。

寝ている間に夢を見ていたようだった。とてもとても、嫌な夢を。

気を間際らそうと首を横に曲げて窓越しに外を見ると、

水気の足りない乾いた雪が風都の風に乗せられて吹雪いている。

「おおッ、雪が降ってるのを見てたら途端に寒くなってきやがった。  
ヒーターは……、押し入れの中にあっただはずだよな、たぶん」

俺はヒーターを探して事務所の押し入れの中を探る。  
ヒーターはすぐに見つけた。埃だらけだった<sup>ほこり</sup>ので、  
一度雑巾で表面の汚れを取ってやらないと使い物にならなそうだった。  
が。

「まったく、古臭エヒーターだな。熱じゃなくて煙が出そうだ。  
最近では整備不良か何かで一酸化炭素中毒、なんてもんもあるし、  
こりゃあ亜樹子と交渉して新しいのを買わせるしかねえな」

だが、今そんなことを言っている場合じゃない。とりあえず暖を取  
ろう。

”風都電機”のロゴが入った古臭くて茶色いヒーターは、

高さの幅が押し入れとフィットしており、持ち上げて出せそうにない。

俺は仕方なく、ヒーターの両端の隙間に手を突っ込み、引っ張り出すことにした。

……くそう、ちくしょう。なんて強情な野郎だ。引っ張っても抜けやしねえ。

こんなときはどうするんだっけな。食用の油でも間に塗れば少しは違う、か？

いや、そんなことでもしようがねえよな。使えなくなっちまう。

ああくそつ、こうしてたらヒーターを使わなくても暖かくなってきやがった。

目的はそうなんだが、使わないでこうなるのは何か悔しい。

「るうおおおおおっ！！……っあッ！」

だがそこはハードボイルド探偵、左翔太郎。

ヒーターごときに負けているようじゃあ男が、いいやハードボイルドがすたる。

ざまあみろヒーター。押し入れという名の天岩戸あまのいわてからてめえを引っ張り出してやったぜ。

「これ……は」

……その中から出てきたのは、ヒーターではなかった。

今引っ張り出したそれと同じぐらい、茶色くくすんだハードカバーの分厚い一冊の本。

俺の愛読するハードボイルド小説の乱丁本じゃない。

中身は見なくても分かる。最後のページを除いて何も書いていな

い白紙だ。

俺はそれを拾い上げると、押し入れの奥深くに押し込んだ。中身を見たくなかった。その存在を思い出したくなかった。

気を取り直し、ヒーターに取り置きしていた石油を突っ込み、コンセントを差し込んでスイッチを入れる。

昔のヒーター特有の油と埃臭い臭いが事務所を包み、すぐさま部屋の中の温度を上げていった。

「ふう。これでようやく人の住める環境になった、な」

——どんどん。どんどん。

「はいはい。今開けますよ、と……んなっ！」

ヒーターの熱が部屋中に伝わった頃だろうか。

品のないノックの音が事務所に響く。何だ何だとドアノブに手をかける俺に、

——すこーん。

緑色のスリッパの強烈な一撃が俺の頭を襲った。

俺が痛みで頭を抱えている間に、”冗談ちゃうわ”と書かれたスリッパの主は、

そんな俺に気兼ねなくずかずかと事務所に入ってゆく。

この事務所の所長で、俺の探偵としての師匠の娘、なるみ あきこ「鳴海亜樹子」だ。

「あーっ！もう！雪が吹雪くぐらいに寒いつてのに、女の子を長あーい間外で待たせるとかどういいう神経しとんねん！

……あ、ストーブの前入るねー」

「だぁーッ、誰だと思ったらお前かよ亜樹子オ。何しに来やがった」

「おほぁーっ。いいの力ナ？いいのかなぁ翔太郎君。

この亜樹子様にそんな口のきき方しちゃって」

いつにも増して妙に上から目線で上からの物言い。

大抵余計なことが落胆させられることばかりなので聞きたくないが、聞かなかったら聞かなかったでまたうるさいだろうし、と俺はため息をひとつ。

とか何とか考えていたら、亜希子の奴が持っていた包みを開けて俺に中身を見せた。

「じゃーん！これ、なーんだ？」

「う、うぉおおおおおっ！」

亜樹子が包みを開けてこれ見よがしに俺の前に掲げたのは一本のDVD。

なんだ、だと？風都の市民でこれを知らないやつは一人もいねえ。

去年の10月に劇場公開された大ヒット作品、「風の佐平次 E P I S O D E : 0」。

そこに20分にも上る未公開シーンを付加した、ディレクターズカット版じゃねえか。

セル版はストア・インターネット共に即日完売。

レンタルですら4、5日待ちという超・超人気商品なんだぞ。

「おい亜樹子オ、なんでお前がこれを」

「ふっふっん。入手ルートはナ・イ・シヨ。それに翔太郎君、

口のきき方には気を付けた方がいいんじゃない力ナ？」

ほれほれ、亜樹子”さま”って言うてみい。あ・き・こ・さ・ま」

「亜樹子……様」

「声が小さアい。りぴいとあふたー・みー」

「亜樹子様！どうかそのDVDをこの俺に貸してくださいでし  
ようかッ！

ああもう、これでいいか！いいよな！？」

「んもう、しょうがないなあ翔太郎君はッ。どーぞ」  
「くそッ、覚えてろよッ」

俺が舌打ちをしてDVDを受け取ったのを見届ると、  
何故だか亜樹子は踵を返して出入り口に向かつてゆく。  
まだ開封されていない新品なのに、あいつは観ないのか？

「じゃ、あたしは行くから、楽しんでてね」

「何だよ亜樹子、もう行くのか？」

「うん。竜くんにお昼のお弁当届けに行かなきゃいけないし」

——あれから半年。照井と亜樹子は本格的に付き合い始めたら  
しい。

そうか。もう昼休みに弁当を届けるほどの仲になったのか。  
なら、俺がここで引き留めるのは酷ってもんだな。

「分かった。照井の奴によろしく言っといてくれ」  
「うん。そうする」

亜樹子はマフラーを巻いて真っ赤なコートを着込み、事務所を出て  
行った。

事務所を出て行くとする時のどこか物憂げな表情がどうも気に入  
らない。

あいつの行動の意図が、俺にはよく分かるからだ。

「さてと、DVDの準備準備と……。ブックレットは、視聴後でいいよな」

だからこそ、俺はあえて亜樹子を追わず、DVDを見ることに専念しようと思う。

いちいちあいつの、あいつらのことを考えてなどいられないからだ。

——だが、だからこそ俺は知ることができなかった。  
ラジオから流れる不吉な何かの予感に。

「——次のニュースです。」

昨日未明、風都刑務所から服役中の囚人が数人脱獄しました。  
風都警察が全力で行方を追っておりますが、危険ですので、  
外出などは極力行わず、見つけられた方は110番に通報をお願い  
致します。

——警察は、脱獄した囚人の名前を公表しました。  
”倉田剣児”、”有馬丸男”、”伊刈……”」

——この街を泣かせようとする、新たな存在の暗躍に——

## prologue 2：Tの来訪/そして半年後の鳴海探偵事務所

「つくはーッ！堪能したーッ」

二時間後。『風の佐平次 E P I S O D E：0』を観終わった俺は、その満足感に浸りながら、残っていた報告書に手をつけている。風は幾分か落ち着いたが、逆に雪の量が増えて、徐々に事務所が積もり始めているのが分かる。

「ああああ、順調に積もってきてやがる。雪かきとか……したくはねえなあ」

事務所の前に積もり続ける雪を見つつ、ハードボイルドな俺らしからぬ作業をしなきゃならないことに、ひそかに頭を悩ませていると、またもドアを叩く音がする。今度は幾分かノックの仕方が丁寧だ。

「はいはい。今出ますよーっと」

俺はダイヤルを回してヒーターの強さを強から中に変え、扉を開ける。

「左、か。上がらせてもらっぞ」

現れたのは、馬鹿みたいに派手な赤いライダースファッションの若い男、

風都署の超常犯罪捜査課・課長の『しょうせい照井竜』。

嫌味でクールなやつだが、なんだかんだで長い付き合いだ。

「何しに來たんだよ照井。お前今日は仕事じゃないのか？」

「亜樹子にこれを返すついでに立ち寄っただけだ。すぐに戻る」

「ついに呼び捨てにするまでになったか。まったく、お熱いねえ。

まあ、それはそれとして、茶出すから待ってるよ」

「お前の淹れるコーヒーは水っぽくて飲めたものじゃない。  
どけ。コーヒーは俺が自分で淹れる」

俺を引き剥がし、人のうちの器具で勝手にコーヒーを淹れようとす  
る照井。

横暴だが、正論なので文句も言えない。本当に腹の立つ奴だ。

煎った豆の入ったサーバーにお湯を差し、

蒸らし具合を眺めつつ、俺に背を向けて照井は言う。

「しかし、11月の時点は会話の中身が上の空。

10月の間は会話がまともに成立せず、9月中は……。

それに比べれば大分まともになったな。表情は暗いままだが」

「何の話だよ。……喧嘩でも売ろうってか、照井？」

「そんなつもりはない。ただ、ミュージアムや財団Xが消えても、

ガイアメモリ犯罪はまだなくなっていない。」仮面ライダー”と  
して戦うお前が、

いつまでもそうして塞ぎ込まれていては、俺が困る」

分かってねえ。こいつは全然分かってねえ。

俺は深く息を吸い込んだ後、わざとあいつの耳元に近寄って言うて  
やった。

「あのな、照井。フィリップは消えたんじゃないねえ。」

地球の記憶と一体になったんだ。今だって俺のそばにいる。  
俺が何を、なんで塞ぎ込まなきゃならないってんだ」

勢いでまくしたてる俺の言葉に照井は何も答えない。

が、代わりに「とても大丈夫には見えないがな」とでも言いたげな顔で俺を見つめる。

勝ったはずなのに、なんだか小馬鹿にされているようで腹が立つ。

「照井……お前、何が言いたいんだ？言いたいことがあるならはつきり」

俺がそう言いかけた時、あいつは上着のポケットから着信音をかき鳴らす  
ビートルフォン  
携帯電話を取りだし、耳に当てた。

「もしもし、俺だ。……ああ、ああ。すぐに向かう」

照井は神妙な面持ちで電話を切ると、  
淹れ終わったコーヒーをテーブルの上に置くと、  
ディフォルメされたうさぎと狼のイラストの入った、  
愛らしい包みを俺に手渡してこう言った。

「悪いが俺はもう行かねばならん。弁当箱はお前から返しておいてくれ」

「おい、どうしたんだ照井。何か事件でもあったのか？」

「俺に質問をするな。お前が出るような事件じゃあない」

いつもの口癖と共に俺の言葉を遮って、犯罪課の課長様は、  
雪降る寒空の中、無駄に赤くて派手派手なバイクにまたがり去ってゆく。

——あれから半年。未だにガイアメモリ犯罪は留まるところを知らず、

この街では大小多くの事件が今でもあちらこちらで発生している。

”仮面ライダー”である俺や照井はその解決や事後処理に追われてばかりだが、

それでも、俺が受け持つ事件や事故処理はかなり少ない。

裏で手を回して、俺に事件に関わらせないようにしているのだろうか。

「かーっ！腹立つなあちきしょう」

俺は照井の置いていったコーヒーに口をつける。

あいつの態度と言動には心底腹が立つが、コーヒーは最高にうまい。

「……って、なんじゃこりゃあ！」

——人と人が愛し合い、付き合うことは素晴らしいことだ。それは認める。

亜樹子と照井が付き合い始めてからもう半年。

”恋は盲目”とは言ったものだが、

味覚や味付けまで影響されることもないだろうよ、照井。

「かーっ……なんでコーヒーに青のりなんて入れるかねえ」

——いかにも亜樹子らしい発想だと思う。が、あいつはこれとちゃんと飲んだのか？

いい味なだけに、青のりのミスマッチさが後を引くのがとても悔しい。

俺は青のりだけを残してコーヒーを飲み干すと、  
残された書類に手をつけるため、椅子に座ってタイプライターに手  
を伸ばす。

その時、だった。

「うおっ！？なんだ、何だッ！」

俺の向かい側の窓を破り、吹雪と共に何者かが事務所の中に入り込  
んできた。

何があつたかとガラスを割った何者かの前に近づくと、  
肩にかかるほどの長髪でぼろぼろの衣服を身に纏った男は、  
俺に向かって不敵な表情でこう言った。

—— 久しぶりだな名探偵。俺の顔を覚えているか？

それは、ヒーターで暖まった筈の俺の心と体を一瞬にして凍りつか  
せる、

とても寒くて、恐ろしい声だった。

## chapter 1：Kの襲撃／俺は仮面ライダージョーカー（前書き）

これより本編開始となります。

本章以降、語りは翔太郎から地の文に変わりますのでご注意ください。  
い。

## chapter 1：Kの襲撃／俺は仮面ライダージョーカー

探偵・左翔太郎は窓を突き破って入ってきたこの男を見て背筋を震わせた。

覚えているか、だと？忘れるはずがない。

「倉田……剣児……！」

倉田剣児。くらた けんじ

かつて仮面ライダーを名乗り、翔太郎とフィリップを苦しめたドーパント。

「アームズ」のメモリを所持していた危険な男だ。

倉田は炯々とした目つきと、それにそぐわない、遊びがいのある玩具を見つけてはしゃぐ子供のような楽しげな口調で彼に言う。

17

「おおつ、俺を覚えてくれたか。感心感心」

「忘れろつつたつて忘れられねえよ。お前のような野郎はな。

なんでお前がここにいる。刑務所抜け出してお散歩でもしにきたか？」

「へえ……、もうニュースになってると思っていたが、そうでもないんだな。

知らないなら知らないでいいさ。俺のクライアントの依頼は、左翔太郎、お前を”どんな手段を使っても殺す”こと、だしな」

クライアント  
「『依頼主』だと？お前、一体何を」

「知りたいか？じゃあよ、地獄で閻魔様にでも聞くこつたな」

「お前……またガイアメモリを……って、何ッ！」

倉田はポケットからガイアメモリを取り出し、起動。

”腹部”に突き刺したそれは、

不気味な反響音を発しながら彼の体の中に吸い込まれてゆく。

「クウガ！」

翔太郎が見たことのない謎の象形文字が描かれた赤一色に、  
ガイアウイスバー地球の声から発せられる”クウガ”という声。

それは見たことも聞いたこともない不思議なメモリだった。

金色の二本角に鉄すら噛みちぎれそうなほど頑強な顎。

細身で青色の右腕に、肩当てがついた緑色の左腕、体を覆う頑健そうな紫の鎧。

腰巻状に腰回りに連なる棘とげのような装飾品。

今まで多くのガイアメモリ犯罪に立ち会ってきた翔太郎だったが、こんなドーパントにお目にかかったことはない。

「なんだそのメモリは」

「なんでも古代の人間が変身したっていう化け物の記憶、だそうだぜ。」

俺もクライアントから聞いたただだから、詳しいことは知らねえがよ。

と、いうわけで。死んでもらうぜ名探偵！」

倉田は首を回してこきこきと回すと、翔太郎の首を掴んで持ち上げる。

翔太郎はとつさに反応し、彼の胸を蹴りあげること腕の力を緩め、首をねじ切られる前になんとか逃げのびることに成功した。

「つとお……、なんて堅い胸板だっつーの！」

だが無傷とはいかない。力強く蹴りあげた翔太郎の右足は、倉田の頑健な装甲とかち合って痛みと悲鳴を上げていた。

これはまずいと背を向け、翔太郎は倉田に背を向けて逃げようとする。

「逃げんなって……そおらよッ！」

倉田はそんな翔太郎を逃がさない。腰回りの装飾品を数個取り外すと、

それを翔太郎に向かって投げつけた。

棘のようなそれは空中で”剣”のようなナイフの形に変化し、ベスト越しに両脇腹、およびズボンの先を刺し貫き、

翔太郎を地面に釘付けにした。

釘付けになった翔太郎を右足で踏みつけ体重をかけた倉田は、勝ち誇り、上ずった声で翔太郎に言う。

「風の噂で聞いたぜエ名探偵。お前もう、仮面ライダーになれないんだってなあ。

まっ、なられたところで負ける気なんてしねえが、好都合にやあ代わりねえ。

ゆっくり、じっくりと……ボコらせてもらうぜ。死ぬまでなあ」

「ンだとオ……？倉田ア！そいつは違う！」

「SPIDER！」

「な、何ッ！くそっ、なんだこの紐は！紐はッ！」

”仮面ライダーになれない”。

フィリップを失った今、翔太郎はWになることはできない。

だが同時に、翔太郎は倉田の言葉の間違いを正すべく、

右腕についた腕時計『スパイダーシヨック』にギジメモリ”スパイダー”を挿入し、

飛び出したワイヤーで倉田の体を縛り付けると、

その隙に彼の足を振り払い、冷たい眼差しで彼を睨みつける。

「仮面ライダーになれない……か。そいつは違うぜ。

俺は仮面ライダーになれないんじゃない。”二人で一人”じゃなくなっただけだ」

「どこが違うってんだよ。一緒じゃねえか」

「一緒じゃあねえ。まるで違う。だからよ……今からそれを、証明してやらあ！」

「ジョーカー！」

—— 変身ッ！

「JOKER！」

翔太郎は倉田の襲撃で部屋中に転がったものの中から、

変身ベルト『ロストドライバー』を掴み取ると、それを自分の腹部に巻き付けて、

ベストの内ポケットから”紫色”のメモリを取り出し、  
ドライバーに差し込んで、バツクルを展開。

紫色の光に包まれた翔太郎は左手と左人差し指を倉田に向けて、大見得を切った。

「何者だ……お前はッ」

「俺は街の涙を拭う紫のハンカチ、仮面ライダー『ジョーカー』！」

”運動能力”を極限まで高める『切り札の記憶』を持ったライダー。彼こそが左翔太郎が単独で変身する仮面ライダー『ジョーカー』だ。大見得を切ったジョーカーは、スパイダーシヨックのワイヤーを引きちぎった倉田に掴みかかり、今の今までのうつ憤を晴らすかのように左拳による連撃と、右拳による重々しい一撃で彼を圧倒、右膝をつかせることに成功する。

「聞いて……ねえぞッ！だが、しょせんは半分こライダーの片側だけ！  
パワーは大したことねえなあ！なあ！」

しかし倉田は、先の騒ぎで折れた椅子の足を掴み、それを青く輝く長尺の棒に変えてジョーカーに襲いかかる。さしものジョーカーも棒術相手には分が悪く、腕で急所を防ぎつつも、ダメージはじょじょに溜まってゆく。

「くそう……面倒な奴だッ」  
「おおっと、俺の力はこのまんじやないぜ。これでも喰らえ！」  
「おい待て、それは空砲……」

倉田は事務所の机に転がっていたおもちゃの拳銃を掴み、引き金を引いた。

これは空砲だと言う翔太郎の声も聞かず、発砲する倉田。

「……って、おおおっ!？」

空砲のはずの拳銃から弾が出て、もんどりうって倒れてるジョーカー

！。

これは一体どうしたことが。

倉田はドーパントとしての能力を用い、空砲に”空気弾”を詰め、それをジョーカーに向けて放っていたのだ。

装飾品をナイフに、木の切れ端を棍棒に、空砲を強力な拳銃に変える能力。

それがこの”クウガ”のメモリに隠されていた能力だったのだ。

徒手空拳の素早さと鋭さが取り得のジョーカーでは対処しきれない。翔太郎は彼の能力を分析しつつそう感じた。

「しょうがねえなあもう……だったら、こっちはこれだ！」

「メタル！」

「METAL！」

翔太郎はドライバーからジョーカーのメモリを取り外すと、メタルのメモリを同じ場所に差し込んで、バツクルを展開。紫色だった体表は鈍く輝く銀色へと姿を変え、彼の左手には専用武装「メタルシャフト」が握られる。

”闘士の記憶”を宿した鋼の鎧と強力自慢きのライダー、仮面ライダー『メタル』だ。

「これで、どうだあッ！」

「おこ……うぐっ！」

仮面ライダーメタルはシャフトを取り回して敵の銃撃を弾きつつ接近し、

隙だらけの倉田の脇腹にシャフトによる一撃を叩きこむ。

メタルシャフトは彼の頑健な肉体とその下の筋肉をたやすく貫通し、一瞬意識を飛ばすほどの一撃を彼に与えた。

「おっと、倒れてくれるなよ倉田ア。お楽しみはまだまだこれからだぜ」

しかし猛攻はまだ止まらない。

仮面ライダーはよろけた倉田の体に対してシャフトを連続で叩き込んで、

事務所の中から彼を奥のガレージの中へと押し込んでゆき、最後に強く振り上げて、床に強く叩きつけた。

先ほどまで優勢を保っていた倉田だったが、体に溜まったダメージでは、戦略的優位性では、既に仮面ライダーに軍配が上がっていた。

「俺の事務所をめちゃくちゃにしてくれやがって、決めてやる！」  
「ジョーカー！」「マキシマムドライブ！」

仮面ライダーはジョーカーのメモリを右腰の”マキシマムスロット”に挿入。  
再び仮面ライダージョーカーの姿に戻り、体にエネルギーが満ち満ちてゆく。

——ライダー……、キック！

そう叫んだジョーカーは、床に伏した倉田目掛け、階段の上から飛び降りて、必殺の飛び蹴りを見舞った。  
だが、倉田も負けてはいられない。

「くそッ！こんなヤワな蹴り、押し返してやる！」

倉田は自分の胸部目掛け飛び込んできたジョーカーの蹴りを両腕で受け止め、

どうにかして引き剥がそうとする。当然の行動だろう。

しかしジョーカーはひるむことも驚くこともせず、

「やってみな。できるもんならなッ」

蹴り込んだ右足を軸に、激しく体を回転させ倉田の腕を弾くと同時に、

さらに破壊力の増した蹴りで、倉田の体を床に亀裂が走るぐらいに叩きつけた。

野太い悲鳴と共に爆炎に巻き込まれる倉田と、そのメモリ。

倉田剣児は、再び普通の人間の姿へと戻っていた。

ドーパントが力の源であるガイアメモリを破壊され、

幾分かの余剰ダメージを負って元の人間に戻る『メモリブレイク』現象だ。

「勝った……か。きつついなあ、まったく。」

ああ、ああ。ガレージがめちゃくちゃだぜ。どうすりゃいいんだよ……」

変身を解除した翔太郎はそこから起き上がることにできず虫の息の倉田を尻目に、

スタックフォン

携帯電話で救急車を呼びつつ、

彼の使っていたメモリの破片を拾い上げてまじまじと見つめる。

「やっぱり見たことねえぞ、こんなメモリ。……組織ミュージアムのものでも、  
ましてT2ガイアメモリでもねえ。なんだ、こいつは」

未知のメモリを前に、これは何だと頭を抱える翔太郎。  
だが、この戦いがまだほんの序章であることなど、  
この時の翔太郎はまだ、知る由もなかった。

一方、電話を受けた照井竜が向かった先では――

## chapter 1：Kの襲撃／俺は仮面ライダージョーカー（後書き）

本編ようやく始動。

なんか最後の方で大仰に煽っていますが、  
そこまで手の込んだ話はしません。

おおよそ10～12チャプターぐらいで終了するはずです。

・仮面ライダーメタルの登場。

”できる”とは明言されていませんが、  
逆に”できない”とも明言されてなかったので出しました。  
本当は後の展開に取っておこうかなと思ったのですが、

W制作スタッフの気前の良さリスペクトというわけで、  
とりあえず顔見せで出しておきました。  
マキシマムドライブはまた今後。

・クウガ・ドーパント

”ドーパント”なので、クウガ当人よりもグロンギに近いイメージで。

装飾品付きの腰巻とかがもろにグロンギですね。

デザインはクウガのモーフィングパワーを魅せることと、  
キバ・ドガバキやアギト・トリニティみたいなこった煮フォームが  
やりたかったので、  
そちらのイメージで組んでいます。

本当は事務所の壁にかかっているダーツをモーフィングパワーで、

剣状のナイフに変えるなんてのもやりたかったのですが、本文の圧縮上カットしました。

そういえばクウガも「倉田剣児」もイニシャルはKですね。

選定理由は倉田が使用した「アームズ」のメモリが、複数の武器を使用して戦うドーパントだったから、というもののなのですが、

名前的にも能力的にも面白い一致でした。

## chapter 2：Kの襲撃／俺は仮面ライダーアクセル

翔太郎が事務所にて倉田剣児の襲撃を受けていたのと時を同じくし、風都公園前の大きな交差点では、

—— いったえええええい！俺、たまんねーッ！！

—— わぁぁぁ……誰か、誰かぁー、姫香を…… 姫香を助けてくださいー。

行き交う車や抑え込もうとする警官を問答無用で薙ぎ倒し、自慢のブレイクダンスを披露して回る、紫のV字の仮面を顔に貼り付けたようなドーパントと、

”ジャック・オ・ランタン”にコウモリを掛け合わせたような顔をし、

全身を縛り付ける拘束の鎖に身を包んだ不気味な風貌にも拘らず、かわ脳味噌がとろけそうなほど甘ったるい声で助けを訴えかけるドーパントが出現し、

ここばかりでなく、周辺半径3kmの道路の交通その他を麻痺させていた。

「通報を受けて来てみれば……なんだあれは」

そんな中、愛機・”ディアブロッサ”を駆って、照井竜が現場に着。

照井は未知のドーパントが交差点上で暴れまわる様を見て啞然とした。

が、自分は風都超常犯罪捜査課の課長。呆けている場合ではない。

「なんでもいい。街の平和を乱すのなら……俺が振り切るまでだ！」

照井は上着の内ポケットの中から”アクセルドライバー”を取り出して腹部に巻き、

同時に取りだした”アクセル”のメモリをドライバーに差し込み、セツト。

「アクセル！」

——変ッ……身ッ！！

「ACCEL！」

その上で、ドライバーについたハンドルグリップを、

まるでバイクのエンジンを駆けるかのように力強く回し、

街の平和を乱す悪への怒りを込め、溜めをつけて変身と叫ぶ照井竜

バイクの回転音にも似た駆動音が鳴り響き、かき鳴らされる爆音と共に、

照井の体に真つ赤な装甲が纏われる。

オンロードバイクを模した体に、アルファベットの”A”をあしらったマスク。

パワフルさと爆発力に満ちた、風都のもう一人の仮面ライダー。

彼が、彼こそが『仮面ライダーアクセル』なのだ。

「さあ、振り切るぜ」

大見得を切ったアクセルは、

警察相手に傍若無人な振る舞いを見せる紫の仮面のドーパントに掴みかかり、

何度か殴りつけた後地面に叩きつける。

あまり効いていないらしく、ドーパントは傷口をさすりつつ簡単に立ち上がった。

「なんだよ痛つてーな赤頭！……じゃなかった。

助けてくれよ！半分こじゃないけどあんたも仮面ライダーなんだろう？俺、なんていうかさ、自分で自分を抑えきれねえんだよ。

もう最高にたまねえんだよ。百万倍のハイテンションなんだよ」

「悪いが、言っている意味が分からん。とりあえず武器<sup>メモリ</sup>を捨てて大人しく投降しろ。

今なら……迷惑条例違反と暴行罪くらいで勘弁してやる」

「だから、俺にはどうにもできないんだって。

その辺で変なメモリを拾ったから警察に届けようとポケットに入れておいたら、

いつの間にか俺の脚に差さっちゃまったみたいで、こんな姿になっちゃまってよお」

「聞く耳もたん、か。ならばそうさせてもらっ」

アクセルは紫の仮面のドーパント目掛けて右の拳を見舞おうとするが、

背後から近寄ってきたかぼちゃ顔のドーパントに羽交い絞めにされ、阻止された。

かぼちゃ顔のドーパントは、脳味噌がとろけそうなほど甘い声でアクセルに囁く。

「うおわっ！何だ貴様は！」

「仮面ライダーさあん、姫香を……姫香を助けてくださいー」

「助けてほしいのなら最低限この腕をどける！苦しいぞ」

「どうにもならないから助けて、って言ってるんですー」

”どうにもならない”。

アクセルはこのドーパントの言葉に引っかかりを覚えた。

今自分の目の前にいるノリの軽い男のドーパントも、

それと協力するかのように自分の首を絞めているこちらのドーパントも、

口では助けを求めているものの、その行動は自分を倒すためのものに他ならない。

その口調にはイライラさせられるが、

助けを求めていること自体は嘘ではない。どういうことか。

答えは一つ。

「なるほど。こいつら二人とも……メモリの力に吞まれているということかッ」

ガイアメモリを使用した人間が、メモリの内包する膨大な情報量と力に負け、

使用者の本能とメモリの中の記憶が同調し暴走状態に陥ることは珍しくない。

そうなると思本人の意思で力を解除することはできなくなる上、

一部のメモリは巨大化やさらに凶悪な力を使用することがあり、非常に厄介だ。

とはいえ、そんな事例を幾度となく体験しているアクセルは、なんだそいうことかと理解した上で、

自分の首を絞めるドーパントに裏拳を浴びせて引き剥がして距離を取り、

メモリの力を抑えきれない二人に対し、冷静に語りかける。

「分かった、分かった。俺がなんとかしてやる。  
自分の力で抑えきれないと言っのなら何も……ぐうっ！」

——やつらは言わば被害者だ。落ち着け。冷静に、冷静に。

アクセルは自分にそう言い聞かせ、動かないようにと促すが、  
紫の仮面のドーパントは、そんな彼にブレイクダンスの要領で、  
強力な回し蹴りをアクセルに見舞う。

「あ、ゴメ。今の俺、最高にたまんねえから」

「……いいか。動くな。動かないよう努力しろ。痛みはメモリブレイク一瞬だけ……  
……らッ」

——冷静に、冷静……に。

アクセルは相手及び自分にそう言い聞かせ、  
そろりそろりとドーパントの元に近寄るが、  
十分に近寄ったことを見計らったかばちや顔のドーパントは、  
アクセルの顔に、脳震盪が起こるほど強烈な右ストレートを見舞っ  
た。

彼の体がよろけ、左右にぐらつく。

「ごめんなさいい」。姫香が、姫香が悪いんじゃないんですう。  
めっ、めっ。止まれ、とまれえ。って心の中で念じてるんですけ  
どお」

——冷静……

「いいか。落ち着け。まずは落ち着くんた。落ちつければ……おこ

っ！」

「ごめんなさいい！仮面ライダーさあん……」

「落ちつけつつたつて、無理なもんは無理だよ。俺、最高にたまんねえし」

アクセルは二体のドーパントに蹴りの応酬と拳の殴打を喰い、雪が積もりに積もったアスファルトの上に叩きつけられた。もう黙ってなんていられない。

「くそっ！よくもやってくれたな貴様ら！もういい！もう容赦はない！」

最初から最後までどこまでも振り切つてやるから覚悟しろ！」

幾度となく自分の言葉を遮り、あまつさえ殴る蹴るの暴行を加えられたことで、

とうとうアクセルの堪忍袋の緒が切れた。

彼は愛機「ディアブロッサ」から専用剣”エンジンブレード”を引き抜くと、

紫の仮面のドーパントに向かって重々しい音を響かせて振り回す。

「このままでは始末書ものの失態だ。それだけは阻止せねば」

ドーパントはそれをダンスのステップと同じ要領で軽快にかわす。かわされて地面に叩きつけられたエンジンブレードの刃が、舗装したてのアスファルトに亀裂を走らせ、陥没させてゆく。

「ちょ、ちょっと！刃物は勘弁してくれよ！怖いって、マジで怖いって」

軽々と取り回せはするものの、元がかなり重いエンジンブレードで

は、

この軽快なステップのドーパントを捉えることはできない。  
アクセルはどうしたものかと思案を巡らせると、

「ならば、素手で勝負だッ」

アクセルは持っていたエンジンブレードを投げ捨て、相手の攻撃に  
対し、  
肉を切らせて骨を断つ”カウンター”で挑むことに決めた。

ちなみにこの時、突き刺さったエンジンブレードが、  
アスファルト上にの大きな亀裂を生じさせたのだが、  
それはまた別のお話。

情け容赦のなくなったアクセルの徒手空拳はまさに強烈無比。  
自分の体への負担も、相手の体への配慮も顧みず、  
相手の攻撃をその身に浴びつつ、無理やりにも自分の拳を蹴りを  
ねじ込んでゆく。

「痛ってーなこの野郎！やさしくしろよやさしく」  
「うるさい！ならばとっとと……振り切るぜ！」

「アクセル！」「マキシマムドライブ！」

アクセルは万感の思いを込め、ドライバーの左ハンドルを強く握り  
捻<sup>ひね</sup>る。

変身の時よりも荒々しい駆動音が鳴り響くと共に、  
彼のボディから排気熱が噴出されてゆき、道路上に積もった雪を蒸  
発させてゆく。

——これで……仕舞いだッ！

体中にエネルギーが満ち満ちたアクセルは、  
左足の飛び膝蹴りで紫の仮面のドーパントをひるませ、  
着地した瞬間その足を軸にして再度飛び上がり、  
空中で腰を強く捻って飛び回し蹴りを見舞った。

ドーパントの胸部にタイヤの跡のようなエネルギーが放出されたか  
と思うと、

心苦しい悲鳴と共にメモリ共々爆風と共に吹き飛ばす。

アクセルの必殺キック『アクセルグランツァー』だ。

「やめてくださいいい仮面ライダーさぁんー、姫香、怖いですうー」

「痛いのも怖いのも一瞬だけだ。我慢しろッ」

「エンジン！」「マキシマムドライブ！」

そう言ったアクセルは、”アクセル”のメモリをドライバーから抜き、

代わりにギジメモリの”エンジン”を差し込み左ハンドルを捻って、  
ドライバーを取り外し、自分の胸の前に掲げる。

瞬間、彼の体は”人間バイク”とでも形容すべき異様な姿に形を変え、

足元から先ほど以上に大仰な排気音を響かせて突進し、  
ドーパントを空中に跳ね上げた。

——振り切る……ぜッ！！

それと同時にドーパントよりも高い位置まで飛び上がったアクセルは、腹部に自分のタイヤを押し当て、地面に向けて突っ込んでゆく。地面に叩きつけられたドーパントはメモリの耐久力限界を超えて破損。

またその際の衝撃からか、自分の体を中心とし、アルファベットの”A”の文字を描いて爆発した。

「まったく……人騒がせな奴らめ。一体どのどいつだ」

アクセルはメモリをドライバーから引き抜いて変身を解除。爆心地で目に隈を浮かべて倒れている犯人たちの様子を伺う。

「俺……最高にたまんねえよ……」

「姫香あ……もうおヨメに行けないですう……」

ウインド・スケール

一人は風都で一番流行しているWINDSCALE社のものとめた、

今時の若者らしいラフな格好の男。

もう一人は童顔で、見た目の年齢に不相応な”お姫様系”ファッションの女性。

「こいつら……どこかで見たような」

照井は顎に指を当てて思案する。どこかで見た、会ったことはないだろうか。

女性の方はすぐに思い出した。風都大学で”明晰夢”めいせいむとやらを研究していた学生だ。

自身の周りに近づく学生たちを、自覚なしに甘い言葉と色香で惑わす危険な女。

そういえば自分にもまとわりついてきたっけなど、  
照井は過去を顧みてうつとしそうに頭を掻く。

もう一人は……亜樹子と話を合わせるために読んだ何かの情報誌で  
顔を見た。

確か”常人には到底不可能な超絶ダンス”『ヘヴンズ・トルネード』  
を、

日本で唯一成功させたコンビの方割れ……だったか。

『稲森なんとか』だったか……、名前はあまり覚えていない。  
そもそもダンスに興味などない。

犯人の身元がある程度割れたこともあり、  
今度は彼らが持っていたメモリに着目する照井。

女性が使っていたものは完全に破損しており、欠片を残すのみだった  
が、

男が使っていたものは幸いにもまだ形を留めている。

照井は破損した欠片と男が使っていたメモリを拾い上げて、  
これは何だと目を近付けまじまじと見つめる。

「改めて思うが……こんなメモリ見たことがないな。何の記憶なん  
だ？」

やはり、記憶にない。形状こそ組織の元と変わりないが、  
欠片になっているものには”コウモリの羽”と”魔方陣”を掛け合  
わせたような

不気味な紋章が躍っているし、形をとどめているメモリの方も、  
紫色の丸の中で、斜めにアルファベットの”T”が混ぜ込まれた不  
思議なものだ。

これが一体何なのかは分からない。だが、分かることが一つだけある。

「組織でも財団でもない、新たな脅威がこの街に……」

照井が新たな脅威に身を震わせた、まさにその時だ。

——照井、悪いことは言わない。この件から手を引け。

彼の目の前に黒いフェルト帽を目深に被り、

ロングコートを身に纏った男が、音もなく現れたのだ。

見覚えもなければ、かなりしゃがれたその声に聞き覚えもない。

「なつ、何者だ貴様！いつからそこにいた」

——俺のことを忘れたのか？照井。まあいい。

これはお前には関係のないことだ。忘れる。

「その口ぶりからして、貴様がこの事件の首謀者か。そうなんだなッ」

——だったら？

「全てを……振り切る！」

照井は再びアクセルドライバーを取り出し、腹部に巻き付けようとする。

が、黒いフェルト帽を目深に被り、ロングコートを身に纏った男は、照井のそんな行動をさも楽しそうに見つめ、笑う。

—— はっは。そうだな。そうだった。お前はそういう奴だったよな。

OK、OK。だったらもう何も言わねえ。あいつと一緒に、朽ち果てな！

「待て、このまま逃がす…… かつ！？」

自分に背を向け逃げようとした男を追おうとする照井だったが、突然吹き付けた風に目を背け、瞬きをした瞬間、男は虚空へと消えていた。完全に見失ってしまったのだ。

「今のは…… 誰だ？」

## chapter 2：Kの襲撃／俺は仮面ライダーアクセル（後書き）

序盤のバトル終了及び、二体のR・ドーパント撃破。

長い間引つ張っていくものでもないのですがこの辺はサクサクです。

やっと目次に掲載されているあらすじのところまで辿り着きました。

本当はあんなアホアホした照井さんなんか書くつもりはなかったのですが、

姫香ちゃんと稲本弾悟17歳がお馬鹿すぎて、釣り合いを取った結果、照井さんまでお馬鹿のノリの被害者となってしまいました。

どうしましょ。本気でどうしましょ。

翔太郎と照井、二大ライダーのバトルパートが終了したので、今回は話の核心というか、話を回すための設定の回になる悪寒。

### デンオウ・ドーパント

変身者が『俺たまんねー』の人なので、変身後はガンフォームのみ。

この企画を考えついた時、”電王”はどうやって出そうか悩んでいた、

”過去の犯人たちを再登場させよう！”というアイデアが浮かんだ際、

『犯人じゃないけどうっとおしい風都市民』をドーパントにしたら面白くね？

と思い、速攻で彼に白羽の矢が立った次第。

なんだかんだ言われていますが、ヘブンズトルネードの回はぼくは好きです。

## キバ・ドーパント

同じような理由で登板した姫香りん。

キバにした理由は『キバ↓王↓女王↓姫↓姫香りん』という謎の連想から。

変身者の都合でキバっぽい動きが全く採用できませんでした。

まあ、半分がギャグ回みたいなものだし……

### chapter 3：訪問者S／強敵凶悪脱獄囚（前書き）

PV・ユニーク共に、拙作「Journey through the Decade Remix」を

軽々と上回る反響に正直冷や汗が止まりません。

と同時に、「今やデイケイドよりもWなんかなあ」という気にもな  
って、

少しだけ寂しく感じます。

つてなわけで、本作を面白いと感じた方はこちらもどうぞ。  
<http://ncode.syosetu.com/n3396k/>

宣伝ですいません。

### chapter 3：訪問者S／強敵凶悪脱獄囚

——俺の名前は『左翔太郎』ひだじょうたろう。

この街唯一にして最高にハードボイルドな探偵だ。

俺は今、愛機・「ハードボイルダー」を颯爽と駆り、  
照井が向かったという風都公園前に来ている。何故かって？

——うちの探偵事務所を襲ったあのドーパント。

ありやあどうみても尋常じゃあねえ。街を泣かせる危険な存在だ。  
俺以外の仮面ライダーで頼れるやつは、悔しいがあいつしかない。  
やつと話をし、今後の対策を練るのが今は最善だと思ったからだ。

——それに、ドーパントがどうかってだけの話じゃねえ。

倉田は……、あいつは俺にメモリをブレイクされた後、  
目に隈を浮かべて気絶するだけでなく、息も絶え絶えになっちまい  
やがった。

全身に痙攣けいれんが走っていて、どう見ても普通じゃない。

——照井のやつは……交差点の往来に立っていやがる。  
地面のあの荒れ具合。どうやらやつも一戦交えたらしいな。

「天下の国家公務員様が道路をぶっ壊すとは、感心しねえな照井」

「左か。来なくても良いと言ったはずだが」

「ああ。俺だって来たくはなかったよ。が、事情が変わった。  
今お前が戦った相手はどうした？」

「相手……？ああ、変な色香を振りまく女と頭のイカれたダンサー  
なら、

先ほど刃野が警察に連行した。話が聞きたければ後にしろ」

苦々しくそう語る照井の言葉から、

翔太郎は”二人の人物”のことを思い出したが、

今は不必要だとしてあえて触れず、自分の聞きたい話を照井に振った。

「一つ聞きたい。今日、もしくは昨日……この街で何があった？」

「何があったか、……と言うと？」

「トボけんじゃねえ。さつき事務所に暴漢が入った。

とつくのとうに有罪になって、刑務所にぶち込まれているような奴がな。

俺とフィリップが倒して捕まえたやつだ。忘れようがねえ」

照井は、お前はニユースも見えていないのかとため息をつくと、

先ほど以上に苦々しげな口調で言葉を紡いだ。

「警察の威信に関わる問題だから大っぴらには言えんが、仕方があるまい。

昨夜未明、風都刑務所から”5名の”囚人が集団で脱獄し、風都に散った。

脱獄の目的、方法、メンバーの共通項は不明。

共犯者がいるはずだが……、他の囚人からの供述、捜査からもそれを見つけたすことはできなかった」

「そいつらが今どこにいるのか……まだ分からないのか？」

「取り沙汰されたのは今朝だ。すぐには見つからん。

それにそいう話なら、探偵のお前の方が適任なんじゃないのか、左」

「違えねえ。よっし、じゃあ早速ウォッチャマンかサンタちゃんあたりに……」

翔太郎は上着のポケットから携帯電話を取り出し電話をかけようとするが、

いざ電話をかけようとした瞬間に着信がかかり、阻止されてしまう。電話のディスプレイに表示されている名前は、「鳴海亜樹子」その人だ。

翔太郎はめんどくさそうな表情と口調で電話に出る。

「亜樹子か？悪いが後にしてくれねえか？今取り込み中……」

「——とつ、取り込み中だっていうならあたしだって取り込み中！翔太郎君！ええっと、竜君もそこにいる？」

「ああ？ああ、照井もここにいるぜ。代わるか？」

「——いいっ！いるんならそれで！っていうかそうじゃなくて！二人とも！早く、早く！急いで事務所に戻ってきて！お願い！」

「どうした、何かあったのか亜樹子」

「——お、お、お、おねがい！早く帰ってきてエ！」

「わ、分かった。分かった……。すぐに行くから落ちついて待つてる亜樹子」

翔太郎は照井に目くばせをして電話を切ると、

二人はヘルメットを被って愛機にまたがり、鳴海探偵事務所へとバイクを走らせた。

「大丈夫か、亜樹子！」

「いきなり呼びつけて……何があった！」

「あー、よかったあ。やっと来てくれたよお」

亜樹子に何かあったかと思い、バイクを飛ばして帰ってみれば、  
当の亜希子はのほほんと、翔太郎と倉田が壊しに壊した、  
探偵事務所の中を掃除しているではないか。

驚き勇み、彼女の無事を祈っていた二人は啞然とする他なかった。

「お前……お前なあ！人を呼びつけておいて何やってんだよ」

「心配したんだぞ！心臓の鼓動が振り切れるほど心配したんだぞ亜樹子」

二人の恐ろしげな剣幕に亜樹子は心底申し訳なさそうな表情を浮かべ、

借りてきた子犬のようにうなだれる。

「ご、ゴメン。ごめん……。でも、来てほしいって思ったのは本当」  
「なんでだよ？お前がそんなことをしてるってことは、誰か別の奴か？」

「うん。それは……」

—— 待っていたわ。 左翔太郎。 照井竜。

「お、お前は……！」

「しゅ、シユラウド！？」

「久しぶりね。もう半年は経つかしら」

”シユラウド”。謎と体中を包帯で覆いし不気味な女。

”ビギンズナイト”の際に翔太郎やその師・鳴海壮吉にフィリップの救出を依頼し、

まだ復讐に取り憑かれていた頃の照井竜に”アクセル”の力を与えた謎の女。

その正体はフィリップの本当の母親、園咲文音。そのさき ふみねガイアメモリ研究の第一人者だ。

そんな彼女が、探偵事務所のガレージの中で、一体何をしていたというのか。

とりあえず、亜樹子が驚きうるたえ、二人を呼んだ理由については得心が行った。

無言で全身包帯女が事務所の中に入って来られれば、

亜樹子でなくとも、恐怖にかられて助けを求めたくなるだろう、と。

「お前、なんでここにいるんだよ。姿を消したんじゃないのか」

「新たなガイアメモリ。……その能力と対策をあなたたちに教えに来た。

ここで話をするのも何ね。三人ともガレージの中まで来なさい」

「来なさいってお前……。ここは俺の探偵事務所」

「あきらめろ左。ああいうやつなのはお前だってよく知っているだろう」

「それにここ、翔太郎君の事務所じゃなくて、あたしの事務所」

「はいはい」

観念した翔太郎は、亜樹子と照井と共にガレージ中へと向かう。

先の倉田との戦いでとどころに亀裂が走ってはいたが、

シュラウドが何かしたのだろうか、

目立った破損のほとんどは既に修復されている。

シュラウドはかつてフィリップが検索結果を書き出すのに使用していた、

大きなホワイトボードの前に立ち、話を始める。

「まず最初に言っわ。あのメモリは私たちが作ったものでもないし、  
正体は私にもさっぱり分からないわ」

「は？」

「はあ？」

### chapter 3：訪問者S / 強敵凶悪脱獄囚（後書き）

設定説明だけで長くなってしまったので分割。

一日に二章更新、と見せかけてただの分割です。ごめんなさい。

## chapter 4：訪問者S／標的は左翔太郎

「おい、なんだよそれは」

「俺たちはお前があのメモリのことを話すというから来たんだぞ」

シユラウドの呼びつけておいてぶしつけな発言に、

照井と翔太郎は憤慨し掴みかかろうとするが、当の本人は彼らをいさめ話を続ける。

「落ち着きなさい照井竜、左翔太郎。そう。そこが問題なの。」

あんなものは地球の記憶にはないし、ない以上作れるはずがない。ならば何故、そんなものがガイアメモリとして存在しているのか」

「お前らじゃないとしたら、財団Xのやつらか？」

T2のさらに上位、T3ガイアメモリ……とか」

シユラウドはやれやれ、と手を額に当てて首を横に振る。

翔太郎はそんなシユラウドの態度に怒りを覚えたが、彼女は無視して話を進める。

「言っただけよ左翔太郎。地球の記憶にないものはメモリにできない。  
い。」

それは組織ミュージアムだろうと、財団だろうと変わらないわ。

そもそもガイアメモリというのは、地球ほしの記憶の中からデータを抽出して分析、

それをあのメモリの中に内包させることで生まれる代物なのよ」

シユラウドは指揮棒で床をこんこんと叩いて続ける。

「でも、あなたたち二人の戦いを見ていて分かったことが二つ。

ひとつは、種類は違えど、仮面ライダーの力でブレイクできるということ。

そしてもうひとつは……、使用者の負の感情に反応して力を増す、ということ」

「何故、そう言える？」

照井の問いにシュラウドは、照井の持つ携帯電話ビートルフォンの色違い、ピンク色の携帯電話を自分の上着の中から取り出して言葉を接ぐ。

「私はあなたたち二人の戦いをこれを通じて見させてもらった。左翔太郎。あなたは仮面ライダーとなつて一体のドーパントを倒した。

それも、かなり苦戦しながらの勝利。

対して照井竜。あなたは二体のドーパントを相手にしながらも、まったく苦戦することなく、あっさりと相手を倒して見せた。来人らいとがいはいえ、この差はどうして生じたと思う？」

「そこで、使用者の負の感情が関わってくる、と言いたいのか？」

シュラウドは翔太郎の言葉にうなづき、電話を操作して、ディスプレイの中に倉田剣児の顔と罪状が描かれた画像を二人に見せる。

「相手の素性を洗わせてもらったわ。

”ツインローズ”という名前で風都を騒がせていた怪盗だったものの、

メモリの力を手にし、仮面ライダーを勝手に名乗った上、冴子と組んで来人を組織に再び引き入れようとしたそうね。

仮面ライダーW、左翔太郎に対する恨みや嫉みは十分。素養も十分」

「恨み、か。なるほど。だからこそあの二人……稲本弾悟と姫香り

んは、  
十分な力を発揮できずに倒された、ってことか。  
あいつら、照井とは大した関わりもねえし、恨みを買う理由もない  
しな」

翔太郎はそうかそうかと、手をぽんと叩いて納得。  
それと同時に、照井は何かに気づいて声を上げた。

「そうか……繋がった、繋がったぞッ」

「うわあ！びつくりするからやめてよ竜くん」

「どうした？何か分かったのか照井」

「お前にはまだ言っていなかったな。脱獄した囚人たちの名前を。  
過去にガイアメモリを使って逮捕された者ばかりだったので、  
俺も名前と顔写真を貰っている。これを見る」

翔太郎は手渡された調書らしきものに目を通す。  
そのすべてに目を通した瞬間、彼の顔はさつと青ざめた。

「かが たいぞう加賀泰造”、”くらた けんじ倉田剣児”、”いかり伊刈”、”ありま まるお有馬丸男”、”たかむら鷹村  
げんぞう源蔵”

……ってこりゃあ、まさか」

「俺はこいつらのことをほとんど知らんが、事件の調書は読んだ。  
やつらは全員、”仮面ライダーに倒されて”逮捕されたそうだな。  
そんなやつらがメモリを持って脱獄し、街で暴れ回っている。その  
目的は……」

恨みや嫉みを原動力として動く謎のガイアメモリに、  
かつ使用者はことごとくWによって刑務所に送られた札付きばかり。  
翔太郎は先ほどまでおぼろげに考え、言えなかったことを口にした。

「俺の、”仮面ライダー”の『抹殺』……」

「えっ！？そんなまさか！あ、あたし聞いてない！」

「倉田のやつが言ってたぜ。」クライアント「依頼主の指示で俺を殺す”ってな。

何者かは知らねえが、脱獄の手引きをしたやつがいる。間違いない」

「だろうな。警察にも近くにいた囚人にもその方法が分からない以上、

そいつもメモリの力を使つたと見ていいだろう。

俺は先の戦いで、それらしき男と遭遇した。

黒いフェルト帽にロングコートで、誰か判別はつかなかったが」

脱獄の手引き、という翔太郎の言葉に対応し、

照井は先ほど現場にいたあの男のことを口にする。

翔太郎はそれは誰だと彼に尋ねようとしたが、

それは無理だと突っぱねられ、気を取り直して口を開く。

「そうか。まあでも、それだけ分かれば十分だ」

「どうするつもりだ、左」

「相手が誰だろうと何だろうと関係ねえ。

風都を、街を泣かせようとするっていうなら容赦しねえさ」

翔太郎は自慢のソフト帽を目深に被り直すと、

脱獄囚を探しに街へ繰り出そうとするが、

シユラウドはそれを厳しい口調で制した。

「待ちなさい左翔太郎。確かに、あいつらを放っておいては街が危険。

でも、それ以上に危惧すべきことがもう一つ」

「何だよ」

「あなたが倉田をメモリブレイクしたとき、倉田は一体どうなった

「？」  
「どうなった……って、ちゃんと気絶したぜ。何か問題があるのか？」

シュラウドは意味ありげにうつむいて彼に言葉を返す。

「そう。運が良かったのね左翔太郎。もしも打ち所が悪ければ、その男は死んでいたところ、だったのよ」

——”死んでいた”？

メモリブレイクで倒したドーパントは激しく衰弱することはあれど、命をなくすほどの事態にはならないはずだ。

翔太郎は戸惑いを隠せず、シュラウドの襟首を掴んで激しく振った。

「シュラウド、それは一体どういうことだ」

「メツ、メモリブレイクされた人間は、メモリの力の影響で過度に衰弱し、

その回復は本人が本来持ちうる治癒能力で直す以外に方法がない。

だが、ガイアメモリの副作用による衰弱は、

半年程度ではとてもじゃないけれど回復し得ないわ。

そんな相手を再びメモリブレイクすれば……、どうなると思う？」

「どうって、そりゃあ……」

そこまで言いかけた翔太郎は、恐ろしさに冷や汗をかき、

同時にこんなことを思いついた首謀者に対し、怒りで体を振るわけだ。

「……死ぬ、ってことか」

「そう。並の人間ならそのダメージに耐え切れずに。

あなたが倒した彼も、生きてはいるけど当分生死の境を彷徨さまようでし

よう」

—— 一歩間違えば殺していたかもしれない。

その言葉は”どんな奴でも生きていてほしい”

ということを信条とする翔太郎の心に暗い影を落とした。

しかし、そこで塞ぎ込んではいられない。

それによって犠牲になる人がいるのなら。救わなければならないのだから。

「言いたいことは分かった。

だが街を泣かせようとするやつらを放つてはおけない。

シユラウド、何か策はないのか！」

「落ち着きなさい左翔太郎。それは私が言うべきことじゃない。

あなたの、あなたたちの経験を思い出してみなさい」

「俺たちの……経験？」

翔太郎は今まで自分とフィリップが何をしたのかと、目をつぶり顎に手を当てて思索する。

そんな中、ふとガレージのソファの上でそれを独占するかのよう  
に、ふんぞり返っている『ふうとくんぬいぐるみ』が目止まる。

去年の暮れ、年末の福引で当たった3等賞だ。

それを見知った翔太郎の頭の中に電流が走る。

「そうか……そう……ことなんだなシユラウド」

「気づいたようね、左翔太郎」

「一人で頷いてどうした左。何か分かったのか」

「ああ。お前は知らなかっただろうが、

お前がここに来る数日前、子供たちが”コネクタ手術を行わずに”

『バード』のメモリを使い回す事件があつたんだ」

「使い回す……、だと？そんなことをしたら」

「ああ。メモリの毒性が一気に増して、死に至る。

俺とフィリップはどうするべきかと頭を抱えたよ。

そこで、風都を愛する一人の男が突破口を教えてくれた。

『メモリが埋め込まれている場所をピンポイントで狙え』。

そうすれば、被害を最小限に押し止めることができる、とな。

これが答え、だろ？シユラウド」

翔太郎の言葉に、シユラウドは黙って頷いた。

しかし照井はその答えには満足できないと、さらに言葉を接ぐ。

「だが、どうやって探す。アクセルにもジョーカーにも、

ドーパントの体内のメモリを探り出す機能などないぞ」

「私が何のためにいると思っているの照井竜。これを使いなさい」

シユラウドはデジタルカメラ『バットショット』を翔太郎に、

ゴーグル及びセンサーを兼ねたガジェット、『デندنセンサー』

を照井に手渡した。

「来人が作ったガジェットに、

”ドーパント体内のメモリのサーチ機能”を加えておいたわ。

これを使えば、メモリだけをピンポイントで叩く事ができる」

翔太郎は特に変わった様子のないバットショットをまじまじと見つめ、

大丈夫なのかとシユラウドに問うが、彼女は何も答えず首を縦に振った。

「ああ、ああ。助かるよシユラウド。とりあえずは動けそうだが分からねえな、なんでお前が俺たちに協力する？」

「私はあの子を、来人を救えなかった。どうしようもなかった。だからせめてあの子の願い、あの子の大好きだった街を守りたい。……親としての罪滅ぼし。エゴと言ってもいい」

翔太郎は複雑な面持ちでシユラウドを見つめた。

正直、彼女のことはどうにも許すことができない。

”母親”という一番フィリップに近い存在でありながら、

あの時、彼女は自分にことを任せてどこかへ消えた。

その身勝手さ、息子が消滅するという事実から逃げたことを、翔太郎はひそかに心の中で根に持っていたのだ。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

街の平和を脅かす者から街を守る。

理由は違えど、その目的の違いはない。浄も不浄もない。

だからこそ翔太郎はソフト帽を被り直して言葉を返す。

「分かった。後は俺たち仮面ライダーに任せろ。

フィリップの大好きだったこの街は、何があっても絶対に守る。俺たちが、な」

翔太郎はシユラウドに対し、心配するなと微笑みかける。

この先どうなるかはまだ分からない。だが今はそれが最善だと思ったからだ。

彼女もそう感じていたのか、何も言わずに再び首を縦に振った。

「さて、と。行こうぜ照井、亜樹子。

もういっぺんやつらを刑務所送りにしてやろう」

「ああ。俺たち仮面ライダーの手で、な」

「うん、うん。あたしも張り切っちゃうぞお」

打倒、脱獄凶悪犯を掲げ決意を新たにした翔太郎たちだったが、彼に届いた一通の着信が翔太郎の言葉を遮った。

ディスプレイには、『エリザベス』という名前が躍っている。

風都の学生事情に詳しい、街の情報屋のひとりだ。

「もしもし？なんだよエリザベス。何かあったのか？」

「——もしも翔ちゃん！？大変だよう大変なんだよう！」

「落ちて着けエリザベス。何があったか説明してくれ。出来るだけ事細かに」

「——でも、だって、だってえ」

「——ああもう。あたしが代わるからケータイ貸して」

あたふたと声をまごつかせる電話口のエリザベス。

すると、電話口の声がハスキーで落ち着きある声質に変わった。もう一人の学生情報屋『クイーン』だ。

「その声、クイーンか。何があつたか教えてくれるか？」

「——うん。今ウインドスケールの風花支店前に来てるんだけど、見たことないヤバそうなドーパントが暴れてるの。」

警察じゃ相手になんないし、それよりなにより、

しきりに翔ちゃんを出せ出せって言ってて聞かないのよ」

「風花支店前だな。分かった。すぐに向かうから待ってる」

電話を切った翔太郎は、すぐさま照井と亜樹子に事の次第を伝える。

「照井、さっそくビンゴだ。」

ウインドスケールの風花支店前に一体。俺を狙ってるドーパントがいる」

「了解した。潰しに行くとするか」

翔太郎の報せに、両の拳を突き合わせて戦意を高揚させる照井。しかしそんな高揚を、亜樹子の素っ頓狂な顔と声がかき消した。

「ちょ、ちょっと待って二人とも！シュラウドが、シュラウドがいないよ！」

「ああ？今は放っておけよ。いつものことだろ」

「そうだ亜樹子。やることが終わればどこかへ消える。

いつものシュラウドだ。問題ない」

「いや、でも、でもっ……」

「それに、今問題にすべきことはシュラウドなんかじゃ……ねえよな照井」

「ああ、まったくもってその通りだ、左」

二人は険しい顔つきで事務所の扉の先を見つめる。

そこにはごわごわとした天然パーマに黒縁眼鏡、

ぼろぼろになった囚人服を身に纏った不気味な男が立っていた。

「見つけたぞ、左翔太郎オ……。あの時のウラミい、今ここで晴らしてくれるッ」

「左、あの男は……まさか」

「裏サイトで”必殺仕置人”なんて名乗って人を襲い、その様子を漫画にして描いてた伊刈ってやつだ」

翔太郎は窓からちらりと外の様子を見る。

遠方から爆音と銃撃音らしきものが耳に届き、

見えにくいが、茶色い土ぼこりを上げて爆煙が上がっている。  
翔太郎は顔を伊刈の方に向けたまま、隣に立つ照井に言った。

「照井、あいつはあいつで手強いが……、任せていいか？」

「任された。お前は行け」

「ああ。そうさせてもらう……、ぜっ」

翔太郎は伊刈が反応するよりも早く、事務所の窓を突き破って外に出、

ハードボイルダーに飛び乗って現場へと向かう。

「待てッ！このまま逃がすかつ」

「待つのはお前だ。その漫画家。仮面ライダーが狙いなら、俺が相手をしよう」

「何い？誰だよお前は！」

伊刈の声に、照井はニヒルににやりと笑うと、  
アクセルドライバーを取り出して腹部にセット。  
アクセルのメモリを起動させつつ口を開いた。

「仮面ライダー……アクセル！」

「アクセル！」

## chapter 4：訪問者S／標的は左翔太郎（後書き）

ようやく全体の流れと言うか、やりたいことが表面化したと言いますか。

この時点で”首謀者”、”依頼人”の正体がバレてないかどうか非常に心配です。

台詞を作っている時点で結構バレバレだったしなあ……。

というわけで、次回以降は再びバトル編へ。

今回一切バトルがなかった分、次回はきっと飛ばしてくれると思います。

## chapter 5：Iは死すべし／はじめての共同作業（前書き）

いまさらですが作中表記のおさらい。

「」↑キャラクタの台詞です。地の文でアイテムの説明に使うことも。

『』↑強調のかぎかつこ。場合によって使ったり使わなかったり。

——↑ダッシュ。心情描写表現や決め技とか必殺技の効果音などに。

四角繋がりのものが上記通り、二角繋がりのものは電話口などに。

「」↑ガイアメモリの起動音声。立木文彦声ですね。

ちなみに、ドライバーに入れた時だけローマ字表記になります。

では、本編をお楽しみくださいませ。

## chapter 5：Iは死すべし／はじめての共同作業

翔太郎が街中へ向かいバイクを飛ばしているその最中、伊刈と照井は事務所の表で向かい合って睨み合い、戦いの始まりを今か今かと待ち構えていた。

——変……ッ、身！

「ACCEL！」

照井は先んじてアクセルに変身。

ディアブロッサからエンジンブレードを引き抜いて、これ見よがしにぶんぶんと振り回す。

その様子を物怖じすることなく、感嘆として見つめる伊刈。

「へえ、デザインは全然違うが、お前も仮面ライダーだったんだな。  
クライアント依頼者からは左翔太郎を殺せって言われているけど、仮面ライダーならなんでもいいよな。めんどくせえ、いってことにさせてもらっぜ」

「能書きはいい。やるのなら早くしろ。さもなくば、俺が振り切る」  
「まっ、そう焦るな焦るな。どうせ終わるのは一瞬なんだし、よ」

「カブト！」

伊刈はずり落ちそうなメガネを直し、”カブトムシ”のマークに”ZECT”と、

黒で上塗りされた絵柄のメモリを腹部に差し込む。

六面体のような形のものが体全体を覆い尽くすと、彼の体は真っ赤な装甲にいかにも昆虫らしい外殻と中羽根、

頭頂部から長く伸びた一本角が特徴的なドーパントへと姿を変えた。

「カブトムシ……か、面白い」

「だな、赤色は二人もいらねえ。負けた方は明日から黄色だ。

……って、てめえに明日なんてやらないがなッ」

変身と同時にアクセルに飛びかかる伊刈。

アクセルは飛びかかる伊刈をエンジンブレードで薙ぎ払おうとするが、

予想以上に硬い外殻装甲と掴みかかる腕力の高さ、拳の力強さに、殴られて突っ伏し、たまらず片膝をついてしまうアクセル。

「硬い上に強い……か。手強いな」

「硬い？強い？ノンノンノン。俺の力はそんなもんじゃあねえ。

軽く撫でただけで怯んじまうような奴にはもつたいないが、

特別出血大サーブスで見せてやるぜえ、しかとその眼に焼き付けな！

……もつとも、目に映るかどうかは知らないが」

腕力勝負で優位に立ったことに気を良くした伊刈は、嫌味な口調でそう言つと、左腰の『色の違う造形物』をさつと撫でる。

彼の体は虚空に消え、アクセルの体が左右に大きく揺れだした。

相手の姿は見えない。だが間違いなくアクセルは『伊刈の攻撃を受けている』。

「はっは！どうだい赤色ライダー！何も見えねえだろ！ついて来れねえだろ！

こいつが俺の力ア！”超加速”能力よ！はっはっは！”

「なるほど、加速……か。おい、亜樹子」

「え、えっ！あ、あたし？」

「あいつの、伊刈のメモリの場所は特定できたか？」

亜樹子は持っていたデンデンセンサーをゴーグル状にし、アクセルを見下して笑う伊刈の体をゴーグル越しに覗く。

サーモグラフィのように表示される伊刈の体の中で、一部分だけ”不気味なほど青く光る”部分があることに気づき、亜樹子は伊刈のその部分を指差して声を上げる。

「竜くん！あし、足！右足の太ももの所があやしいよ！

他の所が赤とか黄色とか緑とかなの、そこだけ青く輝いてる！」

「了解した。よくやった亜樹子」

「でも竜くん、そいつはどうするつもりなのよ」

「忘れたのか亜樹子。俺にはこいつがある」

アクセルはディアブロッサから『信号機とストップウォッチ』を模した装飾が目を引く大きなメモリを取り出し、ドライバーにセツト。

「超加速の力は自分だけのものだ調子に乗っているな漫画家。面白い。だったらこの俺と勝負してみるか？超加速同士で、な」

「何イ？」

「トライアル！」

—— 全て……、振り切るぜツ！

「TRIAL！」

メモリを装着したアクセルは右ハンドルを捻ってそれを起動。信号ランプが赤から黄色に変わると同時に彼の体も黄色に変色し、

同時に体全体に亀裂が走ってゆく。

それが黄色から青に変わった瞬間、彼が纏いし装甲は弾け飛び、まるで街中を走る重量あるオンロードバイクから、荒れた山道を走る軽量化されたオフロードバイクになるかのように、複眼を除く全身が青一色に染まり、重量物を廃した軽々しいものへと変化した。

仮面ライダーアクセルのもう一つの攻撃形態、『アクセルトライアル』だ。

「勝負だ、漫画家ッ」

「面白エ、やってやんよ」

アクセルは『トライアル』のメモリをドライバーから取り外すと同時に、

ストップウォッチ型の「マキシマムモード」に組み直し、スイッチを起動。

常人の目には映らないほどの超高速の力を得、伊刈に立ち向かう。

伊刈もまた腰の装飾を触って超高速状態へと突入し、アクセルを迎え撃つ。

伊刈との超高速同士の戦いが始まった。

超加速能力を得たアクセルは、伊刈の手刀や前蹴り、

カブトムシの角を模したクナイのような武器による攻撃を丁寧<sup>さば</sup>に捌いてゆく。

これで負ける道理などないはず。

アクセルも、この戦いを見ることができない亜樹子もそう思った。思っていたのだが、

「俺について来られる奴がいるなんてなあ、マジで驚きだよ。けどな、お前のスピードにはよ……決定的に『パワー』が足りねえッ」

パワーと身に纏う装甲を犠牲にして加速力を手にした今のアクセルでは、

元から堅い外殻に身に纏った伊刈の装甲を切り崩すことは敵わなかった。

加えて、圧倒ではなく『互角』止まりのスピードであつたことが災いし、

アクセルは容易に攻撃を受け流され、見切られ、寸止めされ、手数 of 速い相手の攻撃を大量にもらって道路上に叩きつけられた。

この間、たかだか3秒程度の出来事である。

「嘘でしょ！？竜くんがスピード勝負で負けちゃうなんて！」

「ところがこれが嘘じゃないんだなあ。すごいだろ？すごいっしょ？」

パワーでも互角。スピードでも互角。

しかしパワーを取れば相手に対応できず、

かといってスピードを取れば相手にトドメをさせない。

伊刈が仮面ライダーを圧倒していい気になっている間、

アクセルは頭の中の脳細胞をフル活用して決めの一手を思案する。

——落ちつけ、落ちつくんだ照井竜。

ブレイクすべきメモリの場所は分かっている以上、

パワーで押し切るような戦いに頼る必要はない。

メモリをピンポイントで叩いてそれで終わりだ。

——だが、トライアルでなければあいつに対応しきれない。  
となると、エンジンブレードでの一刺しか。マキシマムでは隙が多  
すぎる。

——トライアルの加速で使った時間は約三秒。

今のクールダウンを含めて残り時間は……大目に見積もって7秒台  
弱。

その間に奴の隙を突き、メモリをブレイクできるのか？

何をするかはまとまった。だが、不確定要素が多すぎる。

アクセルは散々迷った末に立ち上がると、

地面に転がっていたトライアルメモリを拾い上げ、  
それを恐怖と不安におののく亜樹子に手渡した。

「えっ？……竜くん、これは」

「亜樹子、次のマキシマムドライブ、起動と停止のタイミングは任  
せる」

「あたし聞いてない！無理だよ竜くん」

「あいつのスピードに追い付き、かつあの装甲を突破するためには、  
トライアルのメモリを自分で作動させるわけにはいかないんだ。

お前の力が必要なんだ亜樹子。頼む」

亜樹子が戸惑うのも無理はない。相手は照井を殺すつもりで襲って  
きていて、

アクセルの装備や技をもつてしても、相手に勝てる可能性は薄い。

そんな中、死中に活を求める必殺の策に自分が関わらなければなら  
ない。

負けて殺されてしまった時、自分は彼にどう言い訳をすればいいの  
だろうか。

だが同時に、おそらくな亜樹子の左脳はこうも考えた。

—— いや、ちょっと待ってちょっと待って。ちょいまち。

—— 何？これは何？これはいわゆるアレ？

—— 彼女と彼氏の『はじめての共同作業』ってやつ？

—— すごいじゃん、ヤバいじゃん！やっちゃわなきゃダメじゃん！

「わ、分かったよ竜くん！あたし頑張る！」

「はじめての共同作業、絶対成功させてみせるから！」

「あ、ああ。頼んだぞ亜樹子」

アクセルは彼女がいつたい何を考えているのかはあえて放っておき、いやらしく高笑いをする伊刈の方へと向き直った。

「おほっ、もう話し合いは終わったかい」

「ああ。次で決めてやる。お前の、ゴールをな」

「ごおるう？決まるのはどっちのゴールかな、っとオ」

「亜樹子オ！今だッ！」

「お、お、オッケー！」

アクセルに促され、トライアルのスイッチを押しこむ亜樹子。再び二人の男が超加速空間へと姿を消した。

もう時間の猶予はない。エンジンブレードを握り相隙を窺うアクセルだが、

伊刈は昨日刑務所を脱獄したばかりとは思えないほどに隙がない。苛立ちがミスを誘い、アクセルをさらに窮地に追い込んでゆく。

たった7秒と言う時間が、10分にも20分にも長く感じられた。

「にへへ、こいつで終わりだッ、ポリスメン！」

そして、その苛立ちが決定的なミスを生じさせた。

エンジンブレードを空振りした瞬間を狙い、

背を向けたアクセルの頭上に伊刈のクナイが飛んだのだ。

変身し携行しているとはいえ、エンジンブレードの重量は相当なもの。

すぐさま体勢を立て直すには時間が足りない。

もうダメかと目を背けそうになるアクセルだったが、

——俺、たまんねー！俺、たまんねー！

「っつ、この声は……どこだ！どこだ！」

これはどうしたことだろう。軽薄そうな男の声が伊刈の耳に届いた瞬間、

彼は激昂し顔をひきつらせ、アクセルを無視して声のする方に体を向けたのだ。

なぜそうだったかは分からない。が、チャンスであることに変わりはない。

「今……だッ！くらえッ」

「エンジン！」「マキシマムドライブ！」

アクセルはエンジンブレードを伊刈の右太もみに突き刺し、ほぼ同時にエンジンのギジメモリをブレードに差し込んで発動。ギジメモリの力で突進力を強化されたエンジンブレードは、

強烈な排気熱と蒸気を発し、外殻を含めた彼の右足を”振り切った”。

「トリアル！」「マキシマムドライブ！」

そして、それと同時にトリアルの超加速が中断される。  
亜樹子がタイミングを計りスイッチを切ったのだ。

「亜樹子！今のタイムは！」

「ろ、6・7秒だよ竜くん！」

「よし。ならば一緒に決めるぞ、亜樹子」

「うん！」

アクセルと亜希子は力なく倒れ込む伊刈を挟み込むようにして向かい合い、

二人で大見得の決め台詞を決め、彼に背を向けた。

—— 6・7秒。それがお前の絶望までのタイムだ。

タイミングぴつたりで爆発するところがまた憎らしい。

伊刈は爆発と共に体からメモリを排出し、生気の抜け切った顔で床に突っ伏した。

「う……う……お」

「竜くん、伊刈は……」

「大丈夫だ。生きている。自分の力で立ち上がれそうにはないがな」

アクセルはドライバーからメモリを抜いて変身を解除すると、苦悶に顔を歪ませて横たわる伊刈に声をかけた。

「おい、漫画家……伊刈透いかりとおるだと言ったな。  
お前の漫画、風都署に配属された際の調書整理で読ませてもらった。  
反社会的だが、面白い漫画だったぞ」

「……だから、なんだってんだよ」

「お前の行き先を変えよう。今はまだ無理かも知れんが……、  
お前のゴールは警察病院でも刑務所でもない。  
漫画家となってデビューし、俺を再び漫画で納得させてみる。  
それがお前のゴールだ」

照井の言葉に伊刈は何も答えない。その表情には怒りも哀しみもなく、  
うつむいて、何かを考えてぶつぶつと唸っているだけであった。  
降り出した雪が彼の体を白く白く包んでゆく。

そんな伊刈を警察病院へと連れてゆくよう電話で指示した照井は、  
涙目で自分が来るのを待っていた亜樹子の前に立って口を開く。

「竜くん！大丈夫！？」

「ああ無事だ。ところで、さっきの男の声はなんだったんだ」

「あれ？それはねえ……ごしょーかいします。じゃじゃーん」

照井の問いに亜樹子は自分の周りをぴよぴよこと跳ね回る、  
小さなカエル型のガジェットを指差して答えた。

「フロッグポットだよん。あたしの声を加工してあいつに聞かせた  
ってわけ。

竜くんは知らなかったかもしれないけど、  
あいつヘヴンズ・トルネードの弾悟君のことが大嫌いだったから、  
さ」

「なんだかよく分かんが、またお前に助けられたな。ありがとう  
亜樹子」

「い、いやあ。お礼なんていいよお」

口ではそう言った亜樹子だったが、彼女の左脳の方はそうはいかない。

—— いや？なんでここで離しちゃうのよあたし。

—— チャンスじゃん。キスとかその他の大チャンスじゃん。

—— ここで頑張らないでいつ頑張るってのよあたし！

結論は決まった。

亜樹子は唇を突き出し、目を閉じてじりじりと照井の元へと迫る。

あわよくばというか、照井がこちらを向いたその瞬間にキスを迫る  
魂胆だろう。

5歩、4歩、2歩、1歩。じょじょに照井との間を詰めてゆく亜樹子。

辛抱たまらなくなり、亜樹子は顔を突き上げ、照井の唇を狙うのだが。

「さて、急いで左の援護を……っと、どうした？亜樹子」

「あ、おおお……おぐっ！」

自分が放したフロッグポットに躓き、

亜樹子は照井ではなく地面にキスする羽目になってしまったのであった。

—— あはは、俺たまんねー！俺たまんねー！

「うん、うん、うん。」

## chapter 5：Iは死すべし／はじめての共同作業（後書き）

アクセルトラリアルVSカブト・ドーパント。

能力の効果もあってか、これ以外のカードは考えられませんでした。伊刈はコックローチドーパントでしやし、役振りもはまり役でした。

ここから相手の体もいたわって戦うようになるので、バトルとしてはかなりさっぱりしたものになってます。もつと派手にやりたい気持ちはあるのですが、そうしてブレイクしてしまうと元も子もないしで。

最終話を見ても照井と亜樹子が、

本文のようにくつついたと言う明確な描写がなかったの、  
こういうことをしてもいいのか？と迷ったりもしたのですが、  
立ち止まるわけにもいかなかったの、そのまま振り切りました。  
……よかったのかなあ。これで。

翔太郎VS他のドーパント戦についてはまた後ほど。

### ・カブト・ドーパント

カブトがそのまんまワームみたいになった感じでしょうか。  
武装はクナイガンのようなものだけ。

超加速中は背中から羽が生えて飛んでいるように見える……、  
風に書きたかったのですが、字数の都合で省略しました。

稲本弾悟に腹を立てているという設定は独自解釈なのですが、

正直チヨイ役で出す以外に活用できなかった弾悟をこうして、  
とどめの一撃に使えて本当に良かったです。  
俺、たまんねー！

## chapter 6：砕け散れHノ必殺ツインマキシマム

一方その頃、ウィンドスケール風花支店前の通りでは。

——— そのこのドーパント！お前は完全に包囲されているぞっ！

——— そーだそーだ！メモリを捨てて大人しく投降しやがれこの  
野郎！

超常犯罪捜査課の刃野警部と真倉刑事が中心となって、  
街を脅かすドーパントを包囲して、投降するよう促していた。  
しかし、”力”を持った者が警察の要請に応じるはずなどなく。

「うるせえ！探偵だ！左翔太郎ってクソ生意気なガキを出せ！」

包囲に使用したパトカーを軽々と持ち上げて投げ飛ばし、  
気の向くままに自分の力を誇示して暴れ回っている。  
警察の手に負えるような相手ではないのだ。

「うわお！助けてえ刃さん」

「馬鹿、俺の後ろに隠れたって意味ねえだろ！」

「っていつか刃さん、自分たちいつまでこうしてなきゃならないんです？」

「とりあえず翔太郎か照井課長が来るまでだ。俺らじゃ手に負えねえし、

そもそも俺らはお呼びじゃねえみたいだしな」

「じゃあなんで包囲してるんですかあ」

「そりゃあ俺たちは市民の安全を守る公僕だからに決まってんだろ」

「っていつか刃さん、上、上！」

「うえ？」

真倉に言われて頭上を見上げる刃野。

曇りでもないのに暗いなあというくらい認識だったのだが、まさか空からパトカーが降ってくるとは夢にも思わなかった。

「馬鹿ッ、こういうことは具体的かつもつと早く言え真倉ア」

「今降ってきたんだからしょうがないじゃないですかあ！」

ドーパントが自分たち目掛けてパトカーを投げつけてきたことに気づき、

刃野と真倉は急いでその場から離れようとするが、予想以上に落ちる速度が速く、逃げ切れようない。もうダメだとあきらめかけた二人だったが、

—— こんの、野郎！

「お、おおっ！」

「か、仮面ライダー！」

ハードボイルダーを駆って飛びこんできた仮面ライダージョーカーが、

パトカーを強く跳ね飛ばし、広場の噴水の中に叩きつけた。

噴水の水が雨のように降り注ぐ中、バイクから降りたジョーカーは、茫然としてその場で震える二人の男に声をかけた。

「危ないところだったな。後はこの仮面ライダーに任せな」

「あ、ああ……。あとは任せましたよ仮面ライダー」

「よろしく願いします」

声を掛けられて正気に戻った刃野と真倉はそそくさとその場を離れ、包囲が続ける警官にその場を離れるように促す。

仮面ライダーの力を信じ、邪魔にならないようにとの配慮だろう。

「さあてと、誰だあ？こんなろくでもねえことやらかした野郎は」

「ははは。俺だ。俺だよ探偵気取りのクソガキ君よ」

「お前……は！」

雨のように降り注ぐ噴水と土煙の中、ジョーカーの前に姿を現したのは、

かつてガイアメモリを使って銀行強盗を計画・実行し、

その罪を友人になすりつけて、闇金融に身をやつした凶悪犯、

ありま まるお有馬丸男。通称、『マル』である。

かつぶく恰幅の良い体と憎々しい表情に苛立たしい声。

黒と白の縞の囚人服以外はかつて戦った時と全く変わっていない。

「思い出したか仮面ライダー。それとやっぱり来たな。

クライアント依頼者が言ってた通りだ。”街が泣くとき、仮面ライダーは必ず現れる”ってよ」

「街が泣く時ってお前、そのためだけにこんなことをしたのか？」

「当然。お前を殺せば俺は完全に自由の身だ。」

サム野郎を殺して金を奪い、再び闇社会に返り咲いてやるのよ！」

後々街を泣かせるために、今街を泣かせている。

こんな悪党を許せるはずがない。許しておいていいはずがない。

ジョーカーは左手左指を突き立て、怒りを押し殺して口を開く。

「……言いたいことはそれで終わりか？マル。」

罪を数える必要はねえ。俺がとつとと刑務所に送り返してやるぜ」

「はッ、言っじゃあねえか。」一人”のくせにいきがってんじゃねえ！

お前も、俺の餌食になっちまいなア」

「ヒビキ！」

マルは青い御霊が三つ並んで描かれたメモリを腹部に差し込む。

青白い炎に包まれたマルは、顔の代わりに隈取りくまどがなされ、

膨れ上がった筋肉と紫色の肢体と、背中に背負った大きな棍棒が目を引く、

ジョーカーよりも二回りほど大きい、『鬼』のようなドーパントへと姿を変えた。

「そいつがお前のメモリか。それで位置は…… っと、右肩に埋まってやがんな。らしっちゃあらしいな」

しかしそこは数々の戦いを制してきた仮面ライダージョーカー。

物怖じすることなくバットショットを起動し、メモリの位置を探る。

右肩にメモリがあることを確認したジョーカーは、

ライブモードとなったバットショットを空に放ち、マルに向けて人差し指を突き立てた。

「さあて。ぶっ飛ばしてやるから遠慮なくかかってきな、マル」

「そうさせて、もらっぜッ！」

マルはジョーカーの言葉が終わるが早いのか、

その巨体からは想像もつかないほどの跳躍力で彼の懷に飛び込み、

右と左の拳を振り子のようにしてジョーカーに見舞った。

あまりのパワーに、攻撃を受けたジョーカーの両脇腹がへこんでしまっ。

「くっ……そおッ！痛てエ！痛てえぞこの野郎」

が、負けじとジョーカーも右拳と左回し蹴りで応戦。

ついでに先ほど噴水に突っ込んで壊れたパトカーの破片を拾い、彼の腹部に突き立てた。

「どうだこの野郎」

「ああ？こんなもん……蚊ほどにも感じねえぞクソガキがア」

しかし、マルはそんなものなどどこ吹く風だとも言つように、難なく尖った破片を腹から引き抜き、噴水の中に投げ捨てた。それと同時に、腹部の傷は治癒され、元通りになつてゆく。

彼がかつて使用していた「ビースト」のメモリも、

”圧倒的なパワー”と”再生能力が”売りだった。

メモリはそれを使う人間に惹かれあうからなのだろうか。

「ぶん殴つても蹴り飛ばしても、鉄の破片を差し込んでもダメか。これじゃあ肉弾戦でのメモリブレイクは無理みてえだな……。となると、これしかねえか」

「トリガー！」

—— 変身ッ！

「TRIGGER！」

肉弾戦での戦いに見切りをつけたジョーカーは、ドライバーからメモリを引き抜き、新たにアルファベットの”T”が描かれた

青色のメモリを差し込んでドライバーを展開。

体表が黒一色から青一色に変化し、  
大型の拳銃型武器「トリガーマグナム」が彼の左手に装備される。

「青色！？なんだ、何者だお前エ」

マルの問いに仮面ライダーはニヒルに、左人差し指を立てて答える。

「悪を撃ち抜く風一迅<sup>いちじゅん</sup>。仮面ライダー……『トリガー』！」  
「姿が変わったところで！何をしようってんだッ」  
「何って、こうするに決まってるんだろ」

仮面ライダーはマルが反応するよりも早く引き金を引き、  
両腕の脇、脚の付け根、顔など、急所を正確に撃ち貫いてゆく。  
攻撃を受けてもひるまず、かつすぐに再生する以上、  
回復しても相手がダメージを認識する部位を集中的に攻撃するのは、  
パワーに乏しい今の仮面ライダーからすれば当然の戦法ではある。

「ひ、卑怯……」

「お前が卑怯だ何だって言えた義理かよ。そろそろ決めるぜ」

「トリガー！」「マキシマムドライブ！」

仮面ライダーはメモリをドライバーからマグナムに差し替え、  
銃口を「マキシマムモード」に組み替える。  
メモリのエネルギーが銃身に集まり、限界ぎりぎりまで充実させて  
引き金を引く。

「これで終わりだ！」

——トリガーシューティング！

青く輝く強力なエネルギー波が、マルの右肩を正確無比に打ち抜く。ガイアメモリを貫き、力を奪い、この事件は無事解決。

仮面ライダーも、その周囲で事の次第を見守っていた警官たちもそう思った。

だが現実には、カルピス原液のようにそうそう甘くはない。

「っあーっ。痛てえじゃねえかこの野郎。」脱臼”するかと思っただぜ」

「馬鹿な……、マキシマムを受けて平然としていられるだど！」

「あんなへなちょこビームでやられてたまるかってんだ。

ま、せつかくだ。お前も武器を使うってんなら、俺もそうさせてもらうぜえ」

マルは背中に背負った棍棒を右手に構え、ぶんぶんと振り回す。

彼にとっては使い心地を確かめるための単なる素振りだが、その素振りが周囲の空気をも切るとなると、気が気ではない。

「くそガキが、ぶつつぶれちまいなア！」

「うお……をッ!？」

そして、再び彼の懷に飛び込み棍棒による攻撃を叩き込むマル。

標準的な体格の成人男性三人を、横並びにしたほどの太さの棍棒は、仮面ライダーの意識を一瞬駆り取り、地に伏せさせるほどの威力を誇った。

地面を転がり追撃を避けられたはいいが、これをもう一撃喰らえば次はない。

しかも、棍棒による一撃はそれだけでは終わらない。

攻撃を喰らった仮面ライダーの体が、体内で激しく揺れている。

棍棒の中から発せられた何らかの”波”が、

彼の三半規管を大きく震わせているのだ。

「なんてこった……思うように体が動かねえ……ッ！」

「はっはっは！どうしたどうしたクソガキ！」

「どんだん、どんだんいくぜえ！いっちまうぜえ」

「く……そッ！」

「メタル！」

「METAL！」

やむなく、防御能力に優れる”メタル”へとチェンジし、棍棒・メタルシャフトでマルの棍棒を受け止める仮面ライダー。だが、棍棒から発せられる何かの音波のようなものは、直接体で触れずとも、彼の体を蝕<sup>はじむ</sup>んでゆく。

——ちくしょうッ、目が霞む……、気持ちが悪りい、満足に立てやしねえ！

——なんとか、なんとかならないのかッ、どうにかできねえのか！

——メモリが……メモリがこんなに近くにあるってのに！

力の差に打ちひしがれ、何も出来ないことに舌打ちをする仮面ライダー。

もうどうにもならないのかとあきらめかけたその時、彼の視界に何かが留まった。

「バット……ショット、か？」

マルに押し潰されそうな仮面ライダーを気遣うかのように、彼らの周囲をばさばさと飛び回るバットショット。

そういえば、先ほどメモリの場所を知るために使っていたか。

「いや、待てよ……そうか、その手があったか！  
バットショット！俺の元に来い！来てくれーッ！」

その姿を見て何かに気付いた仮面ライダーは、  
三半規管を揺らされ、立ち上がることにできない状況の中、  
今出せる最大音声でバットショットの名を呼んだ。

感情があるのかどうかは定かではないが、  
バットショットは彼の叫びに呼応し、ひとりでにメタルシャフトの  
先に連結する。

「む？なんだ！何が起こったッ」  
「よっし、これで大丈夫だ」

メタルシャフトに取りついたバットショットは、  
人の耳には聞こえない”超音波”を発して金属の羽を震わせ羽ばた  
いた。

超音波はマルの棍棒から発せられる音の”波”と反響し、  
双方が双方共に打ち消し合っているのだ。

パワー面では劣っているままだが、これでライダーを阻むものは何  
もない。

その上、ブレイクするべきメモリは自分の目と鼻の先だ。

「よくもやってくれやがったなマル、だがこれで仕舞いだ！」

「メタル！」「マキシマムドライブ！」

——メタル・フルパワースマッシュ！

仮面ライダーは力を振り絞ってマルの棍棒を振り払うと、  
その一瞬の隙について、シャフトにメモリを差し込み、  
マキシマムドライブ必殺技を発動してマルのメモリを砕こうとする。が、

「甘エ、甘い甘い甘い！さっきも言っただろうがよオ！  
てめえなんかのふにやっちんパワーじゃ、俺には勝てねえってよ！」

マルはマキシマムドライブなどお構いなしに、  
シャフトに手を掛け力づくでそれを引き抜こうとしたのだ。  
通常のWならこの一撃でカタがついていただろう。

だが今はWの変身者は翔太郎一人。押し込むだけの力が足りないのだ。

「ちくしょう……やっぱり足りねえか。しゃあねえなもう。  
……寿命がちよっと縮んじまうかもしれないが、アレで決めてやる」

そしてそれは翔太郎自身が一番良く知っていることでもあった。  
だからこそ、彼は手を染めなければならない。  
かつて相棒にその使用を禁じられ、自身も深いダメージを負ったあの技に。

「だったらこいつで勝負だぜマル。ツイン……マキシマムだッ！」

「ヒート！」「マキシマムドライブ！」

仮面ライダーはドライバー側のスロットに”ヒート”のメモリを差し込み、

震える手で起動を兼ねたスラップスイッチを叩いた。

”マキシマム”の音声がとめどなく鳴り響き、

メタルシャフトの両端には紅蓮に燃えた熱き炎が灯る。

「フィリップう、頼むぜえええッ！」

——メタル・ソニックブランディング！

かつて相棒と共に放った必殺技”メタルブランディング”。

今際の際に相棒が残したソウルメモリをシャフトに押し込み、  
一人で放つ必殺技。

威力こそかつてのそれと何ら変わらないものだが、

それを、今では命を削る覚悟でないと放つことができないという事  
実に、

翔太郎は落胆の念を隠せなかった。

「ぐ……うおお、おおおっ！なんでだあああッ！」

もちろん、命懸けの一発が届かないわけがない。

メタルシャフトの一撃はマルの右肩の膨れ上がった筋肉を刺し貫き、  
見事にメモリをブレイクして見せたのだった。

「はあ……ッ、はあ……ッ。勝ったぜこの野郎。どうだ、こんちき  
しよう。」

またフィリップの奴に救われちゃったな」

仮面ライダーはガッツポーズを取ったままその場に仰向けに倒れ込  
む。

ツインマキシマムの使用がこたえ、立ち上がることが出来ないのだ。

そんな中、伊刈との戦いを終わらせ駆けてきた

照井と亜樹子がディアブロッサに乗ってやってきた。

彼らはライダーの体をうまく隠すように立ち回り、同時に翔太郎もドライバーからメモリを抜いて変身を解除する。

「左！」

「翔太郎君！大丈夫！？」

「亜樹子に照井……、そっちはどうだ？」

「お前ほどじゃあない。ケリはついたから安心しろ」

「そっか。なら問題ねえな。俺も今終わったところだ」

問題ない。口ではそう言いつつも、

一人で立ち上がることが出来ないほどふらふらで、目の焦点があつていないほどの負傷を負った翔太郎。

亜樹子はどうしてそうなったのかを考え、彼を気遣い、口を開いた。

「その傷……、また使ったの？ ツインマキシマム」

「不可抗力だ。やらなきゃこっちがやられてた」

「そう……。でも無茶だけはしないで」

——無茶はしないで、か。そうだな。

翔太郎は自分の今の姿を見て嘲り笑った。あざけ

相棒がいなくなり、街のためになりふり構わず戦うこの姿。

フィリップがいたらなんて言うだろうか。そう考えると笑わずにはいられなかった。

「——みなさんご覧下さい！ 仮面ライダーがドーパントをやっつけてくれました！」

風都市民のみなさん、仮面ライダーに惜しめない拍手を！」

どこかの場所の、どこかの建物の中。

暗がりの中に小さなテレビが置かれ、三人の男がそれを囲んで眺めている。

仮面ライダーとマルの戦いはいつの間にかテレビで実況中継されていたのだ。

「おいおい、ケンジに続いてマルまでやられちゃったぜ」

クライアント  
「依頼者さん、大丈夫なんですかい？」

二人の男は仮面ライダーのな意外な強さに恐怖を感じ、後ろに座る黒いフェルト帽にコートの男に声をかける。  
が、男は恐怖など微塵も見せずにこう返した。

「問題ねえさ。次の奴は特別だ。ライダーと言えど……勝ち目はねえ」

黒いソフト帽を目深に被った男はテレビ画面越しににやりと笑った。

「あつ、照井課長！ご無事でしたか」

「刃野に真倉か。問題ない」

「申し訳ありません照井課長、実はちょっと……手違いがありました」

「手違い？」

無事を確認し、今まで逃げていた刃野と真倉が照井の元に駆け寄ってきた。

「実はその、照井課長に手渡した脱獄犯リスト、なんですけどね？」

照井課長が出て行つてすぐのことなんですが、  
さらにもう一人脱獄犯が出たことが分かりまして。  
大掛かりな脱獄の中でこっそりひっそりとやられちゃって、  
今の今まで気付かなかったらしく……」

「それで、そいつの名前は？」

「はい。彼女の名前は……」

照井が刃野と真倉を相手に即席で新たな脱獄犯を確認している最中、  
翔太郎と亜樹子は”ここにいるはずのない”人物を見つけ、  
驚きと恐怖に顔をひきつらせていた。

「あたし……聞いてない、聞いてないよ……！」

「嘘だろ……なんでお前まで！やめろ、やめてくれ……、真理奈！」

つむら まりな  
津村真理奈。

翔太郎の幼馴染で、ウィンドスケールの元トップデザイナー。

彼氏だった男と組んで会社の上役を殺し、かつその彼氏をも殺害した罪で、

現在刑務所に収監されているはずの女性だ。

情報がない上完全にノーマークだったこの人物の登場に、

翔太郎は落胆と絶望と悲しみの念を浮かべていた。

「ごめんなさい翔ちゃん。これ……私には抑えきれそうにないの……」

助けて、助けて……翔ちゃん！」

真理奈は震えると手と目に涙をいっぱい溜め、  
腹部に向かう右手を左手で精一杯抑えながら彼に助けを求める。

だが、それを抑えることはできなかった。

「リュウキ！」

## chapter 6：砕け散れH／必殺ツインマキシマム（後書き）

中盤の大型バトル終了。

ツインマキシマムは本編では発動させた相手がウエザーだったせいで、

何がすごいのかさっぱりで、当時ちょっと落胆したものです。

（ゆえに照井とのツインマキシマムが映えたわけですけど）

なので、今回こうして採用させていただきました。

ですがそれゆえに次回翔太郎がヤバいことになってしまったのですが……。

Wの最終回を見ました。きれいすぎるほどきれいな風呂敷畳みに、最後までさわやかに終わったラストは文句なしの満点なのですが、ああいう風に終わってしまうと、”この小説では何を書くべきなのか”、

そもそもこの小説はダメなんじゃないか？

と入らぬ自問自答ばかりになってしまふ結果に。

とりあえず到着点は決まっているので、

なにはともあれそこまではお付き合いくださいませ。

ちなみに、今回のでだいたい全体の半分が過ぎました。

・ヒビキ・ドーパント

響鬼さん本人と言うよりも、

ディケイドにおける「牛鬼」みたいなものを。

敵を清める必要がないので、音撃は直接相手を攻撃するものに変更。

作中でも触れていますが、『ビースト』のメモリも、

超速再生能力があったり、パワーファイターな面があったりと、

一致が多くて書き手がビビってます。

……結構何も考えないで選定してるんだけどなあ。

## chapter 7：燃え尽きるM／バイバイありがとうさようなら

「リュウキ！」

これまで彼らが倒してきた他の脱獄囚たちと同じく、

『龍の顔』を模した紋章が描かれたメモリを腹部に挿し込む真理奈。

乱反射して煌びやかに輝く鏡のようなものに包まれた彼女は、  
顔に白銀の鉄仮面を貼り付けたような顔に、全身赤色の体。  
両肩についた龍の足のような装飾が目を引く盾を身につけた、  
見てくれは仮面ライダーに近いドーパントへと姿を変えた。

「翔ちゃん、ごめんなさい……。私、わたし……」

「いいんだ真理奈。お前は悪くない。」

悪いのはお前にそんなメモリを与えた黒幕の野郎だ。

ちよつと待っててくれよ真理奈。俺がすぐに元に戻してやるからな」

やめて止めてと助けを請いながらも翔太郎を襲う真理奈。

彼女自身に戦う意思はないものの、メモリが彼女の感情を無視して  
暴走し、

動くもの、自分の意思を妨げるものを無差別に攻撃を行っているの  
だ。

真理奈自身にはどうしようもないのだ。

翔太郎はツインマキシマムの反動で疲労困憊キックバックひろうこんばいの体をお圧して立ち上  
り、

今一度仮面ライダーに変身しようとする。

亜希子はそんな彼を、足元がおぼつかずに倒れそうな彼の体を支え  
つつ言う。

「待つてよ翔太郎君！今の自分の状態を分かっているの？」

ぼろぼろなんだよ？いつ倒れたっておかしくないんだよ！」

「んなことは言われなくたって分かっている。」

だが、俺がやらねえで、誰が真理奈を助けるっていうんだ！」

——それは、仮面ライダーである俺の役目だな、左。

「照井！」

亜希子に支えられて立ち上がるのがやつとな翔太郎を見かね、

照井はアクセルに変身して真理奈の前に立ちふさがった。

だ、翔太郎はそれを由としない。

「ダメだ、ダメなんだ照井。俺がカタをつけないと……。」

今まで倒してきた奴らは、自らメモリを手にして俺を、この街を襲い、泣かせようとしてきた。擁護<sup>いっく</sup>できねえ。

だが、真理奈は違う。罪を数えて改心する気があるというのに、こんなこと望んでやしないのに、黒幕とやらに利用されているだけなんだ。

こいつは俺の責任だ。俺がカタをつけなくちゃ、

真理奈の心は晴れやしねえんだ」

——変……身……っ！

翔太郎はドライバーを巻き、ジョーカーのメモリをセットして今一度変身。

自分を抱き抱える亜希子を振り払い、戦いの渦中へと歩を進める。アクセルは一旦真理奈を引き剥がすと、ジョーカーの前に立ちふさがった。

「左、やめろ！これ以上戦えばお前はッ」

「照井……お前は”死なない”男だったな。

ああそうだ。たしかにお前の不死身さには、呆れを通り越して笑っちまう。」

だが、俺だって死ねない。絶対に死なない。

相棒に、この街をよろしくと頼まれたんだ。

まだ何も終えていねえのに、死んでなんていられるか！」

この男は言っても聞かないし止まらないだろう。

アクセルは掴みかかる真理奈を引き剥がしつづため息をついた。

「分かった、分かった、なら好きにしろッ」

「言われなくてもそうさせてもらっさ」

「しょ、翔ちゃん……ダメ、私のところに来ては……ああ、ああッ  
！」

「落ちつけ真理奈！おち……っ……」

だが次の瞬間。止めようとしていた二人の仮面ライダーは啞然する  
他なかった。

苦しみ悶え、絹を裂くような叫び声を上げる真理奈の体は、  
首はルージュのように赤く輝く鱗に覆われながら伸び、  
両肩についた盾のような突起物からは、龍の足だけでなく、  
赤き龍と黒き龍の”顔”と”胴体”までもが顔を出し、  
大型重機のような嫌な音を響かせながら膨れ上がってゆく。

広場の時計の秒針が一周回りきる頃には、

真理奈の体は、赤、銀、黒の三色の首が目を引く、

周囲の建物よりも大きな三つ首の怪物へとなり果てていた。

「これは……」暴走」か」

「ここは真理奈が夢破れ、そのために人を殺し、同犯の彼氏をも殺し、

俺たちが彼女を倒して、刑務所へ入れることとなった場所だった。

脱獄して再び俺と出会って、この場所に戻って……。

再び憎しみの感情がぶり返したんだ。暴走するには十分すぎる動機だ」

「どうするつもりだ左」

「真理奈が出てきた以上、こういう事態が起こり得ることは想定済みだ。

だから、こっちも助っ人と呼んである」

「助っ人、だと？」

携帯電話型のスタッグフォンをこれ見よがしにアクセルの眼前に出すジョーカー。

瞬間、広場にカスタムチューンされた四輪駆動車よりも派手な轟音を響かせて、

Wの顔を模したかのような車体に、拳銃の”回転式弾倉”<sup>マガジン</sup>を備え付けた装甲車が現れ、

雄叫びを上げる真理奈を突き飛ばした。

仮面ライダージョーカーの高速移送装甲車、『リボルギャリー』である。

「よっし、ちゃんと来たな。後は頼むぜ」

「こんなでかいものを街中に呼びこんで、何をするつもりだ左」

「もちろん、こんなのを広場で暴れさせておくわけにはいかねえだろ。

ギャリーを使ってどこかに移送してそこで叩く。お前も手伝ってく

れ」

「それはいいが、どこに移送する」

「決まってるあ。そいつは——」

ジョーカーの指示を受け、突き飛ばしてもんどりうった隙を狙い、リボルギャリーは真理奈をの体を持ち上げ、広場を離れ、市街地を抜け、

ぐんぐんとスピードを上げて道なき道を走り抜けてゆく。

その先には——

「それは、ここだッ！」

「なるほど、こういうことか」

風都の道なき道を通つ切ったリボルギャリーは、海に通ずる川に差し掛かったところで急ブレーキ。

真理奈の巨体を運動エネルギーの力で川の中に叩き落とした。

「川の中とは考えたな左。これなら被害も最小限に留められる。」

その上、二本足にあの巨体では、浮力が邪魔してまともに動けまい」

「そういつこつた。さあて、と」

「トリガー！」

「TRIGGER！」

遅れて、ハードボイルダーを駆るジョーカーと、

バイクモードとなって亜希子に乗せたアクセルが現場に到着。

ジョーカーはメモリを差し替えてトリガーに変身し、

境界線が開き、格納庫<sup>ハンガー</sup>となったギャリーの中に乗り込み、

車両後部の緑色部分を黄色いものに組み換えて、川の中へと入ってゆく。

ハードボイルダーの海戦形態「ハードスプラッシャー」だ。

「チクつとするかしんねえけど、我慢しろよ真理奈ア」

ハードスプラッシャーは水上を所狭しと駆けまわり、専用武装の魚雷と、トリガーの銃撃で真理奈を攻撃。

だが、今や広場に収まりきらないほどにまで巨大化したその体には、魚雷や銃弾の一撃など、風麵屋台の分厚いチャーシューに、少しつまようじが刺さった程度にしか感じなかったようだった。

——翔ちゃん！やめて、止めて……ッ！

体内で反響する悲鳴を上げつつ、その上でしっかりと反撃をする真理奈。

両肩の赤と黒の首から繰り出される火球弾に、

足がつかず、ばたばたとものがくことで生じる大津波。

これでは川の中に誘い込んでも、打つ手がない。

「おい左、これから先どうするつもりだ！一方的じゃないか」

「これから、ねえ……。やりながら考えるさ！」

「ああしてお膳立てしておいて、馬鹿かお前はッ！」

「しょうがねえだろ、ふらふらで目もかすんできてるってえのに、そこまで頭が回るかってんだ！」

「ああッ、もういい！俺がやってやる！」

翔太郎のあまりの計画性のなさにいら立ったアクセルは、亜樹子を降ろして自分もバイクフォームのままリボルギャリーの中に入り、

後輪部分を折りたたんで、格納庫の中にしまわれていた、

『赤い飛行機型のマシン』と連結し、勢い良く空へと舞い上がった。Wの武装を利用して完成した新形態「アクセルタービュラー」だ。

「半死人の左には任せておけん！俺が振り切るぜッ！」

アクセルはバイクモードから上半身のみを解除し、エンジンブレードを構え、スピードに物を言わせて飛び回り、真理奈の巨体を縦横無尽に切り裂いた。

が、これも大した効果は上げられない。

ドーパントと化した真理奈の、とてつもなく分厚い肉体の前には、エンジンブレードの一撃も風花饅頭の薄皮を切る程度にしかならなかった。

「くそう、何だあれは……化け物かッ」

「まぎれもなく化け物だろ。ありゃあ」

翔太郎はどうしたものかと腕を組むと、川岸でデンデンセンサーを使って真理奈を眺める亜希子に声をかけた。

「亜希子オ、真理奈の中のメモリは見えたか」

「見えた。見えたには見えたんだけど……」

「はつきりしねえな。何が見えたんだ」

「それが……あの三つの首、全部にメモリの反応が……」

真理奈が挿したのは龍の顔が描かれたメモリ一本のはずだ。それが何故三本も反応を示すのだ。翔太郎は困惑してしまう。

「ンな馬鹿な。三本もメモリ挿してるってのかよ。ありえねえ」

「落ちつけ左。亜希子、もう一度よく見る。何か”違い”はないか」

アクセルの言葉に今一度中身を確認する亜希子。

注意深く彼女の体を観察すると、三つの首に何かあることに気がついた。

「あぁっ、えつと……。ある！あつたよ！

真ん中の頭はすごく青く光ってるけど、残りの二つは消えちゃいそう！」

「どういうことだ照井」

「おそらく、巨大化によってメモリの力が分散され、

力の一部が残留しているのだろう。真ん中の首さえ仕留めればブレイクできるが、

そうすればあのエネルギーは彼女の体内に滞留してしまう。

元々弱った身だ。そんなことがあればひとたまりもないだろう」

「くそっ、やっぱ全部叩かねえとダメってことか」

「それはいいが左、どうやって仕留める。まずそこをどうにかすベきだろう」

場所は分かってても、ブレイクできなければ話にならない。

今の自分たちの装備では相手に負傷を追わせることすらままならないのだ。

そんな中でいったいどうするというのは、と憤慨するアクセルだが、意外にも翔太郎は動じずにその対策を口にした。

「いいや、場所さえ分かればこっちのモンだ。手伝ってくれ照井。

今回ばかりはお前とのツインマキシマムでしかどうにもならん」

「ツインマキシマム、か。いいだろう。言ってみろ」

翔太郎は”サイクロン”のメモリを取り出して答える。  
これもフィリップが彼に残した遺産の一つだ。

「俺はこいつをボイルダーに挿し込み、お前はそのままマキシマムを使い、

両の首を挟み込むようにして全力でぶつかってやるのさ。

残留エネルギーをぶっちぎって、そのまま二人して真ん中の首に突進する。

どうだ、照井」

また無茶な作戦を立てたものだ。いや、作戦などと呼んでいいのか？と、呆れて仮面の下でつい笑ってしまうアクセル。

だが、この時点でそれ以外に良さそうな手立てはない。となれば。

「言いたいことは多々あるが……、いいだろう、乗った」

「お前のケツのもんも俺んとこのマシンだ。派手にやっちまってくれ」

「上等だ」

「しかし、なあ……こうもでつかいと、狙い……がッ」

翔太郎はリボルギャリィの中でハードボイルダーを、

”スタートダッシュモード”に換装すると、

空を飛ぶアクセルと、真理奈の首三つが全て並列に並ぶ瞬間を待つ。だが、三つの首は皆意思を持っているかのように縦横無尽に動き回り、

アクセルもそれに翻弄されて空を駆けるため、

三つ全てが並列に並ぶことは不可能に近い。

「ダメか、ダメなのかッ！これじゃあ……真理奈が！」

「絶望にゴールするには早いぞ左。助っ人なら俺にだっている」  
「何だって？」

翔太郎がそのことを疑問に持つよりも早く、  
真理奈の左首に強力な火球弾が襲った。

左の首は本能的に砲撃の方向へと顔を向ける。

そこには、黒と青を基調とした戦車型の機動兵器が立っている。  
アクセル専用のサポートロイド「ガンナーA」だ。

「そうか、ガンナーユニット！」

「こいつで奴らの首の位置を集中させる。」

お前は今のうちに準備しろ！あとはこっちで合わせるッ」

「恩に切るぜ、照井！」

アクセルの指示に従い、所構わず砲撃を乱射するガンナーA。

これにたまらず怒りを覚えた三本の首は、

三つの口を対角線で繋いだ頂点上にエネルギーを集中させ始めた。

首三本のエネルギーを集めて、ガンナーを吹き飛ばそうという魂  
胆である。

だが、これは翔太郎たちにとっても大チャンスだ。

三つの首が、ついに並列に対角線上に揃った。

「今だ、声合わせて行くぜ照井！」

「面白い！」

「サイクロン！」「マキシマムドライブ！」

「アクセル！」「マキシマムドライブ！」

—— ツインマキシマム！ホットロットタイフーン！

翔太郎はボイルダーの投入口にサイクロンメモリをセットし、アクセルはドライバーの左ハンドルを強く捻って、同時に三本の首を目掛けて突進を敢行した。

加速用のバックパックを取り外し、

サイクロンメモリの力でまさに”風”となったボイルダーと、アルファベットの”A”を模したかのような”炎”になったアクセルは、

まったく同じ距離を走り、同じ距離を飛んで二本の首を貫き、その勢いを殺さずに真ん中の首を挟み込んで首の中のメモリを碎き飛ばし、

川の上では季節外れで時刻外れの鮮やかな花火が上がった。

彼ら二人の目論見は、

彼ら自身の見事なコンビネーションにより見事成功したのだった。

アクセルは勢いを殺し切れずに、

十数メートルほど川岸のアスファルトを壊して滑り、

翔太郎はハードボイルダーの勢いに負け着地の瞬間に横転し、川岸の芝の上をごろごろと転がった。

「おい、生きてるかー。照井」

「俺に質問をするな」

「ああ、大丈夫ってことか。そりゃ結構」

アクセルの無事を確認した翔太郎はジョーカーのメモリに差し替えると、

ふらつく体を圧して川の中に入り、

川の中心部で意識をもろうとさせて浮かぶ真理奈を抱き抱えた。  
臨まざる変身ゆえに体力は限界に近く、息も絶え絶えではあったが、  
幸いにも命に別状はない。

「真理奈、真理奈！大丈夫か！しっかりしろ！」

「しょう……ちゃん、あたし……」

「もう大丈夫だ。メモリは俺たちがブレイクした。

得体の知れねえ力に悩まされることはねえ。安心していい」

翔太郎は真理奈の頭を自分の肩に乗せて抱え、  
巻き足で岸まで泳いで彼女を連れてゆく。

こんな悲惨なシチュエーションでなければ、

どれだけ喜ばしいことだっただろうと、翔太郎は心の中で肩をすく  
めた。

が、そんな彼女が消え入りそうな声で翔太郎に囁いた一言は、  
そんな浮ついた考えを軽く吹き飛ばし、絶望の淵へと叩きこんだの  
だった。

「翔ちゃん……落ち着いて、聞いて？」

「真理奈、もういい。もうしゃべらなくても」

「わたし、ね？実は黒幕ってやつ顔……見たの。

目もとの冷たさを黒いフェルト帽で隠していて、  
人生に絶望しきったようなしゃがれた声で、それで、それでいて――

――

―― そんな、そんなことがあるか！あるもんか！

「でも、私が名前を尋ねたら自分から答えたわ。――って」

——嘘だ……、そんなの嘘だッ！

その声は岸近くの亜希子と照井はおるか、半径数キロ近くにまで響くほどの大音声であった。

——嘘だろ、嘘だつて言ってくれよ、真理奈ア！

氣力を全て使い果たした真理奈は、もう何も答えてはくれなかった。

## chapter 7：燃え尽きるM／バイバイありがとっさようなら（後書き）

本編における大型バトル終了。

もともと短いスパンで終わらせるべき一作だったので、  
真理奈なんていうイレギュラーというか因縁の相手も、  
結局はこんな役回りでフェードアウトに。

” 助けを請いながら襲いかかってくる ”

という恐怖感もあんまり出せずじまいでちよいと消化不良かも。

次回はチャプター3だか4だかみたいなバトルのない話になりそうです。

リュウキ・ドーパント

等身大戦はだいたいやりつくした感があったので、  
最初から巨大化前提の敵。ってかただのキングギドラ。

タービュラーにスプラッシャーにギャリーに、

ついでにガンナーAと、ビークルを出せるだけ出しました。

……もう出すべきビークルってないよね？

全部出し切ったよね？

## chapter 8：Oの告白／始まりの場所で（前書き）

一体どなたなのかは存じませんが、  
毎回毎回評価してくださって誠にありがとうございます。  
励みにさせてもらっています。

## chapter 8：Oの告白／始まりの場所で

「翔ちゃん……いくらなんでもそりゃ無理だつて」

「やめなよ翔太郎君、吐いちゃうよ」

「うるせえ！まだ食い足りねえんだ、じゃんじゃん持ってこい！」

真理奈を警察病院へ移送してから三時間後。翔太郎は精をつけるからと、

『風麵』の屋台でどんぶりを占拠するほど巨大ななると格闘していた。

ベテランのフードファイターですら一杯食べればもう十分な、

「チャーシューなると麵特大盛豚の角煮乗せ」という玄人向けメニューを、

既に二杯も完食し、これより三杯目に突入しようとしているところである。

これには傍目に見ている亜希子も照井も、

風麵屋の店主も、そこでバイトをしているサントちゃんも啞然とした。

「何があつたか知らないけどもうやめときなよ翔ちゃん。」

このメニュー、一杯1300円だよ？麵の量も通常の三杯よ？

翔ちゃんのお腹も、翔ちゃんの財布も爆発しちゃうよ？」

「関係ねえ、ツケだツケ。こっちは食って体力戻さないといけねえんだよ。」

あ、こら亜希子オ！どんぶりの中からチャーシューと角煮を抜くんじゃねえ！」

見かねた亜希子は翔太郎のどんぶりの隙間から箸を入れ、

チャーシュー二枚と豚の角煮を奪って口に入れて言った。

「翔太郎君さつきからなんか変。真理奈さんから何を言われたのよ」  
「関係ねえよ。黒幕ってやつをぶっ倒さなきゃならねえ」  
その決意が新たになっただけだ。何も変わっちゃいねえ」

翔太郎がそう言うと、亜希子の向かいに立っていた照井が、  
風麵のなるとを箸ですくい、シュレッダーの中に引き込まれる書類  
のように、  
するすると口の中に運びながら言葉を返した。

「どうだかな。少なくとも今のお前は街を守るためにではなく、  
個人の”私怨”のために動いているように見える。以前の俺と同じ  
ようにな」

「んなわけあるか。俺は俺だ。いつだって変わりやあしねえ」  
「そうか。ならば好きにすればいい」

「とてもそんな風には見えないがな」という言葉を押し止め、  
照井は白いれんげでスープをすくって口の中に放り込む。  
味噌ベースにかつおだしの効いた味わい深いスープだった。

「おおおい、翔ちゃん、翔ちゃん！」

そしてそこに、無精ひげを生やし手入れの行き届いていない髪の毛、  
どことなく不気味な風貌の男が、自転車を漕いでやって来た。  
街のいかかわしい情報に詳しい情報屋、『ウオッチャマン』である。  
ウオッチャマンは自転車を風麵の屋台に立てて止めると、  
肩で息をしつつ、翔太郎に箱の包みを渡して言った。

「これ、風花饅頭二十個入り。」

行きがけにあそこの娘さんとばったり会っちゃって、翔ちゃんの話をしたら、

是非持つて行つて下さいって。ああお代は結構ですって言つてたから」

「おおつ、サンキュー。ちょうど甘いものが欲しかったところだ。ところで、頼んどいた例の件はどうなった？」

ウォッチャマンは胸をどんと叩き、にやにやと笑みを浮かべて答える。

「ばつちし。船を一艘貸してくれたよ。」

波止場の方に止めてあるから好きな時に使つてくれってさ」

「ありがとうよ。ほれ、報酬だぜ」

「わおおお！若菜姫のサイン入りブロマイドオ！すごいよ翔ちゃん！ありがとう、ありがとうお翔ちゃん！」

「いいつてことよ。これくらい気にするなって。」

さて、と。飯も食つたし、俺は寝る！二時間後に起こしてくれ」

風麵三杯をつゆも残さず完食し、風花饅頭を口いっぱいに頬張つた翔太郎は、

日除けのある場所に置かれた青いベンチの上で横になり、大きないびきを立てて眠り始めた。

「ありやりや、寝ちゃったよ翔ちゃん」

「だらしないったらないねえ」

「ねえねえ亜樹ちゃん、翔ちゃんはどしちやったのよお？」

「あたしも……、聞いてない」

「なんだか知らんが、一人で何か厄介事を背負い込んでいるようだ」

ベンチの上で横になって眠る翔太郎を見て、皆思い思いの言葉を口

にする。

がーとうるさいびきを立てて眠る当人は、一体何を考えているのかと。

誰にもうかがい知ることは出来なかった。

そしてそこからきっかり二時間半後。日も落ちかけた夕刻の中、翔太郎と照井と亜樹子はウォッチャマンが借りた小型の船を飛ばし、街を抜け、倒壊したビルだけがぽつんと残る離れ小島へと足を踏み入れていた。

かつて翔太郎とフィリップが出会って仮面ライダーWに変身した場所であり、

同時に、翔太郎の師匠・鳴海壮吉を失った因縁の場所でもある。

「悪いな亜樹子、お前までこんなところに連れてきちまって。

本当は来なくてもよかったんだぞ」

「いいよ。今はもう大丈夫だから」

”今は翔太郎君の方が心配だから”という言葉で亜樹子は喉元で呑みこむ。

言っても聞かないことは承知の上だからだ。

亜樹子が口を閉ざすと同時に、さらに照井が翔太郎に声をかける。

「左、何故ここに来た。犯人を探しに来たと言うなら、確証はあるのか？」

「俺を誰だと思っているんだ照井。こう見えても探偵だぜ？」

以前報告書に貼っておいた写真を情報屋たちに見せて、潜伏先を洗ってもらった。

そうしたら、昨日海沿いのボート屋で小型船舶が一層盗まれていた

ことと、

朝方、近くで漁をしていた漁師がこの島で何か光るものと、  
街へ出てゆこうとする船を見かけたって情報を聞いた。確証なら十分だ」

「しかし、そう都合よくいくものなのか？」

「上手く行ってくれなきゃ俺が困る」

「俺が困る、ってお前……」

——はあーっはっはっは！よくぞここまで来たな探偵！

——お前の血でこの島を、お前の墓場を真っ赤に染めてやるぜ！

さすがにそれは性急な判断すぎないか、と照井が言いかけた瞬間、  
草葉の陰から二人の男が嫌味な表情を浮かべて顔を出した。

「お前らは……加賀に、鷹村！」

一人は金にがめつそうな繋がり眉毛にてかてか脂ぎった中年男性。  
もう一人は夕方なのにサングラスをかけた態度の悪そうな男。

かつて”ミリオン・コロッセオ”という裏カジノを開き、

多くの参加者から金や魂をせしめていた加賀泰造に、  
かがたいぞう

ミュージウム  
ガイアメモリ流通組織の一社員にして、

メモリの力である家族をばらばらに引き裂こうとした鷹村源蔵。  
たかむらげんぞう

どちらも札付きの悪人だ。

「ははッ、久しぶりだな天才じゃないほうの仮面ライダー！」

お前には随分と世話になったからねえ、たっぷりと礼をさせてもら  
うよ」

ミュージウム  
「てめえ組織をぶっ潰しやがったんだってな。」

いいところを見せて幹部に成り上がろうって俺の計画も全部パアだ。こうなったらお前をぶっ殺して自由の身になって、俺が組織のボスになってやるぜ」

「ファイズ！」「ブレイド！」

加賀と鷹村は恨みと悪意を込めて翔太郎を睨みつけ、メモリを腹部に挿してドーパントに変身。

鷹村は青と白を基調とした刺々しい”カブトムシ”顔に、六本の腕全てに日本刀や白銀の剣、鎖鎌や短剣などを持ったものへ。加賀はギリシャ文字の”Φ”<sup>ファイ</sup>を貼り付けたような顔に、腕力強化のパンチングユニットや大型大筒のビーム砲を装備した、メカメカしい造形のドーパントへと変化した。

だが翔太郎はそれもいい加減ワンパターンだと無視し、両側に立つ亜樹子と照井に言った。

「な。やっぱりここで間違いないだろ」

「残りの二人が待ち構えているとなると、黒幕はこの先か」

「だろうな。行くぜ、照井」

「了解した」

—— 変身！

—— 変……身ッ！！

メモリをドライバーに挿してジョーカーとアクセルに変身し、襲い来る加賀と鷹村を迎え撃つ二人のライダーだったが、

「悪い照井、こいつらの相手は任せた。黒幕の野郎は俺が倒す」

「おい、待て左！どこに行くつもりだ」

ジョーカーは加賀の頭を馬跳びをするようにして飛び越え、アクセルに赤・黄・緑の三つのメモリを投げて寄越し、単身黒幕の待つビルの中へと向かっていったのだ。

アクセルも、彼を標的としている鷹村と加賀も、慌ててジョーカーの後を追おうとするが、渡された三本のメモリを見たアクセルは、

「くう……ッ、しようないやつめ！」

「ルナ！」「マキシマムドライブ！」

「なんと！」

「なにをう！」

アクセルがエンジンブレードに”ルナ”のメモリを挿し込んだ瞬間、ブレードの刀身はまるでゴムのように自由自在に伸び、二体のドーパントの体を縛り付けた。

その際に仮面ライダージョーカーに変身した翔太郎は、風を切って走り抜け、倒壊したビルの中へと向かってゆく。二体の強敵ドーパントの相手をアクセル一人に任せたまま。

「左！どこに行くつもりだ、左イ！」

「あたし……、あたし聞いてないよ！待って、翔太郎くん！」

部屋中に金網が張られ、物言わぬ物々しい機械が数多く置かれたこ

の場所で、

黒いフェルト帽に黒いコートの男は、『六本角の紋章』が描かれたメモリを握り、

一人部屋の中に佇たたずんでいた。

「半熟に帽子はまだ早え。帽子つてのは、

男の目元の冷たさと、その奥の優しさを隠すために被る物……、か。今の俺は……どうなんだろうな」

——似合わないに決まってるんだろ。お前みたいな奴にはよ。

瞬間、男の持っていたメモリが火を噴いた。

いや正確には”何かに撃ち抜かれて吹き飛んだ”と言うべきか。

男は砕けたメモリを床に投げ捨てて、少し焦げた右手をかばうと、その”何か”が飛んできた場所に視線を向けた。

全身真っ青の仮面ライダー『トリガー』が、マグナムを構えて立っている。

仮面ライダー……、翔太郎は男の姿を見つめて何も言えずにいた。彼の考えを見透かしているのか、男は翔太郎にさも愉快だと口を開く。

「倉田やマルはともかく、真理奈まで仕留めるとはやるじゃないか。正直、お前がここまで来るのは計算外だった。褒めてやるぜ」

彼の人を食ったような態度や言葉に苛立ちを覚えた翔太郎は、意を決して口を開き、言葉を紡ぐ。

「俺に恨みを持つ奴らだけを選んで、脱獄させてメモリを与え、自由を与えると嘘うそぶいて、負ければ死ぬことは教えなかった。

そいつらを風都に解き放つことで、街を守ろうとする俺を誘き寄せ  
る。

その裏でひそかに真理奈を刑務所から逃がし、  
彼女の心に怒りと恐怖を植えつけて離して俺を襲わせた。

真理奈が他よりひと際危険な状態にあることを知っていながら。

……全部、俺を殺すためにやったこと、なんだな」

「そうさ。お前を殺す、それだけのためにやった」

「そのために街が犠牲になっても、よかったっていうのか」

「もちろんだ。この街に救う価値などない。

そんなことにいちいち気を使うことに、何の意味がある」

何故か。どうしてなのか。

そう言い放った男の言葉に翔太郎は、肩を落とし手をつき膝をつい  
た。

それだけは言っただけでなくなかったと、そんなこと信じられるものか  
と。

「どうしたハーフボイルド探偵。何故そうショックを受けることが  
ある」

「知ってて言ってるくせに、なんでそんなスリした態度でいられる  
んだ。

正体を知らないとも思っているのか？俺は真理奈から聞いてるん  
だけ。

なあ、訂正しろよ。嘘だっって言ってくれよ……」

——左、翔太郎

## chapter 9：Dは悪魔／史上最強最悪の仮面ライダー（前書き）

前回あとがきがなかったものでこちらで。

### ブレイド・ドーパント

ストレートにカブトムシの外観で。

六本足全部に剣があるっていうのは、

「ロックマンゼロ」の中ボスみたいなイメージでしょうか。

正直これもアギトのメモリと一緒に砕いてしまっ算段でしたが、出すだけ出そう、ということに登板。

### ファイズ・ドーパント

ファイズというよりもオートバジンに近いのかな？

携帯している兵器が無駄に大きめにして本物と差別化。

これを加賀が扱っているのは単に、

「ブレイドよりはファイズの方が高価そうで、

加賀のキャラからすると好みそうだなあ」という、

ある意味消去法、ある意味在庫処理的な意味合いです。

それでは、本編をお楽しみください。

## chapter 9：Dは悪魔／史上最強最悪の仮面ライダー

——”左翔太郎”。

その名前を聞いた男は、目深まぶかに被ったフェルト帽を少しずつ上げ、翔太郎と目線を合わせた。

短い無精髭ヒゲを生やし、固く結んだ唇に、皺しわが深く刻まれた顔。気合と覚悟がないと怯んでしまいそうなほど、暗く淀んだ冷たい目つき。

スーツの下に着ているYシャツを除いて、何もかも全てが黒一色の服装。

真理奈の言っていた通りの男だ。黒いフェルト帽が自分よりも似合っ  
て見える。

同時に翔太郎の中に一つの確証が浮かぶ。

自分が自分を見間違うはずがない。こいつはまぎれもなく、  
歳を取った自分自身だ、と。

だからこそ、翔太郎は彼に疑問を投げかけた。

「何でお前がここにいる。姿を変えるドーパントか？それとも幻覚  
か何かか」

「変身？幻覚？まあ、当然の疑問だろうな。

俺だってこうして、昔の自分を顔を合わせるとは思ってたなかった。  
説明してやるよ」

男はコートのポケットの中から、

”時計の秒針と短針”でアルファベットの”T”を現した絵柄のメモ  
リを取り出した。

「"TIME"。『時間の記憶』を宿したメモリだ。今から二十年後。未だにしつこく稼働していやがったメモリ工場を潰した時に見つけた。未来に行くことはできない。地球がまだ"未来"を記憶していないからだ。当然だな」

「んなことは聞いてねえ。なんでこんなことをしたかと聞いているんだ」  
「まあ、そうだろうな。事細かな説明より理由の方が大事だよな。いいだろう」

男はコートの中からしわくちゃになったメモ用紙を取り出して、書いてある文字をさも感慨深そうに一字一句感情を込めて読んでゆく。

「——照井竜。2018年5月22日、ロケット・ドーパントによる強烈な一撃から、  
鳴海……あぁいや照井亜樹子を庇い、絶命。遺体は本人の希望で灰にされ、  
風都タワーの最上階から撒かれた。」

——照井亜樹子、旧姓・鳴海。2021年6月5日、夫の死による倦怠から、  
子どもの前で手首を切って湯に浸けて自殺。

——ウオッチャマン。2025年6月19日、左翔太郎からの依頼を受けての調査中、  
その背後にいた組織の末端に背後から刺され、失血死。

——サンタちゃん。2027年8月8日、自身の経営するペットシヨップに押し入った

暴漢ともみ合いの末に絞殺。左翔太郎はそれを止めることができず。

——クイーンとエリザベス。2030年12月12日、芸能界入りをして風都を出た後、

アイドルグループに入ってお茶の間の人気を集めるものの、暴走したとあるファンにより、彼女たちを含むメンバー4名が銃殺。

——真倉瞬と刃野幹夫……」

「もういい！もう……やめてくれ！やめて……くれよ」

翔太郎は声を荒げて叫んだ。この男は自分の未来の姿だ。

嘘をついている様子もない以上、これは今後起こりえる事象であると理解し、

これ以上聞きたくないと耳を塞いだのである。

男は翔太郎がそうした態度を取ることを予期していたかのように、乾いた笑いを浮かべて言葉を続けた。

「分かるか昔の俺。俺は全て失った。相棒も、仲間も。

事務所も経年劣化で引き払わざるを得ず、近所の安いアパートで借り暮らしさ。

相棒も仲間も事務所も、持っていたものを全て捨てて戦っても、この街を襲うガイアメモリ犯罪はなくなりはない。

それでも戦えというのか？それでも守れというのか？

反省も学習もせずに、何度も悪行に手を染める街の人間を！

そんな愚かな人間と、ガイアメモリをいつまでも許容するこの街を！

分かるか昔の俺。この街は腐っている。救いようがないんだよ。ガイアメモリという悪魔の種は、この街に根付いて引き抜けない。俺がどれだけ踏ん張っても、腐り落ちて塵と化すのは止められねえんだよ」

翔太郎は耳を疑う他なかった。

自分の写し身どころか、自分自身の未来の姿が、自分の愛する街のことをここまで悪く言えるはずがない。

しかし同時に納得もしていた。今まで親しかった仲間が皆死んで、それでもなお相棒との約束に縛られ続けていたとしたら、自分は一体、どうなっていたのだろうと。

きつと目の前の男のようになっていたのだろう、と。

だが、そうなると府に落ちない点もある。

「だったら……、なんでここに来た。

風都のことが嫌いになって、それを壊したいというのなら、ここでなくなっただいいじゃないか。自分の時代でやりゃあいい」

当然の問いだ。男はそう言われるのを待っていたかのように、自嘲気味に笑って、ソフト帽を浅く被った。

「分かっているいな。俺は街を自らの手で”壊したい”んじゃない。この街を守るという無駄な作業に踏ん切りをつけてしまいたいだけだ。

だからこそ、このメモリを挿した。愚か者ばかりが残る今の風都を捨て、

仲間が、相棒がいた昔の風都を眺めながら命を断とうとしていただ

けだ。

だが、一杯喰わされたよ。とんでもない粗悪品メモリだ。戻るには決断が遅すぎた、とでも言っべきかな。見てみる」

男は再び”タイム”のメモリを翔太郎の目の前に掲げ、

これ見よがしに起動ボタンを押しつける。

しかしメモリから地球の声ガイアウイスバーが聞こえることはなく、

亀裂と共に粉々に砕けて地に落ちた。

「たった二十年戻るだけでこのザマだ。よりもよってこの時期で、あと半年戻ることができればあいつに会えたというのに、そこでストップだ。」

俺は一体何のためにここまで来たんだ？何をすれば良いのか？

迷い、悩み、街を彷徨ったよ。そして……」

「今回の計画を思いついたと、というわけか。」

分からねえ。全然分からねえぞ。なんでこんな計画を思いつく必要があった。

俺を殺したければ正々堂々とやればいい。ドライバーはお前も持つてるだろう」

男は何故か難しそうな表情を見せ、首を左右に振った。

「残念ながらそうはいかない。今の俺はタイムメモリの副作用で、過去の自分自身に触れることができないんだ。お前に触れた瞬間、俺はお前と完全に”同期”して消滅する。この時間軸の人間ではないからな」

正直なところ、翔太郎は彼の言っていることの半分は理解できていない。

余りにも突拍子がなさ過ぎて、彼の理解の範疇を超えているからだ。

だが、彼は他の誰でもない、二十年後の自分自身である。そして、今まで自分たちの理解を超えた事態がいくつも起きた。理解はできないが、納得しなければ気持ちが悪かったのだ。

「分からないことも多いが……大まかなことはが見えてきた。けどよ、これでもう終わりだな。お前の手駒はもういないし、お前自身も俺が触れば消えちまうだけだ。勝負はついたぜ」

人差し指をびつと突き立てて彼を追い立てる翔太郎だったが、男はそんなことなどど吹く風と、にやりと口を歪ませて言葉を紡ぐ。

「なあ、俺。まだ探偵ものの推理小説は読んでいるか？俺は生活の足しに全部売り払ってしまったが」

「何の話だ」

「まともにやりあえば確実に死ぬというのに、わざわざ敵の目の前に来るようなやつがいると思うか、ってことだ。俺は違うぜ。お前だってそうだろう？同じ俺なんだからよ」

男は身に纏う黒のコートを大きく開き、数多く仕込まれたメモリの中から、

悪意や欲望と言ったものが渦巻き、アルファベットの”R”を象つたものを取り出した。

「リベンジ！」

「リベンジ？なんだそのメモリは」

「知らなくて当然だ。さっき話した工場の中で見つけた”特別製”だからな。」

こいつは今から二十年後に完成した”復讐”の記憶を宿したメモリ。

コネクタ手術を用いても人体に挿すことはできないが……」

男は”リベンジ”のメモリを起動させたと同時に、何も書かれていない空のメモリに押し込んだ。

赤黒いエネルギーが空のメモリに注がれてゆき、再びリベンジのメモリを引き抜く頃には、

”バーコード”と”複眼”が掛け合わさったかのような、不気味な模様のメモリへとその姿を変えていた。

「こうして、空のメモリに地球の記憶を注ぎ込めるといっわけさ。そしてこいつは、全ての理を”破壊する”最強の仮面ライダー……」

「デイクイド！」

男は自分の腹部に先ほど精製したメモリを差し込んでドーパントに変身。

見ていると目が痛くなるほどのピンク色に緑色の複眼、頭に黒い板が何枚も縦に刺さった顔が目を引く異形の存在がそこにいた。

「なんだ……こりゃあ」

「驚くのも無理はないよな。俺だつて最初は驚いたさ。

今の世界に飽き飽きして、俺はタイムのメモリを使って過去に戻るうとした。

時間を超えるその旅の中で見かけたのが”こいつ”と、お前たちがやり合った仮面ライダーたちの死体と、そいつらの”私怨”の塊だ。

何があつたかは知らないが、争い合い憎しみ合い殺し合い、

望みを叶えることなく死んで、私怨だけが過去の記憶の異空間の中に残っていて、

このメモリはそこに渦巻く”私怨”を喰らい尽くし、糧とした。

そして俺がその記憶を空のメモリに移し、あいつらに与えたというわけだ。

覚悟しろよ昔の俺。こいつは元の強さも私怨の強さも並みじゃないぜ」

男は……ディケイド・ドーパントは金網を飛び降り、翔太郎に飛びかかるうとする。

しかし、翔太郎はディケイドが自分に触れるよりも早くトリガーマグナムを発砲し、

相手の攻撃を寸断したのだが、

「そうはやるな。すぐに砕いてやる。メモリも希望も……お前の全てをな」

「大口叩けるのも今のうちだぜ、喰らえッ！」

「トリガー！」「マキシマムドライブ！」

——トリガーシューティング！

ディケイドは左腰に納められた大型の銃を引き抜いた。

相手に先に攻撃させまいと、翔太郎はトリガーマグナムの銃口を、マキシマムモードに変えてメモリを挿し込み、

必殺技でディケイドの胸部を撃ち抜かんと引き金を引いたのだが、

「いいだろう。まずはトリガーから……潰してやるよ」

ディケイドは臆することなく右手に構えた銃の引き金を引く。

銃口から六面体のピンク色のビームが放たれ、

翔太郎が放った青色のビームを包み込み、全て防ぎきってしまった。

「うそだろ！なんだよこれは」

「呆けている場合じゃないだろう、なあ俺」

マキシマムドライブを無効化されて戸惑う翔太郎に、  
ディケイドの情け容赦ない銃撃が放たれる。

彼の放つ青色の光弾は決して直線を描かず、幾重にも湾曲して、  
翔太郎がどこに動こうが正確に彼の体を撃ち貫いてゆく。  
まるで、ルナトリガーの変幻自在の銃弾攻撃のようだ。

「んなろあ、だったら接近戦だ！」

「メタル！」

「METAL！」

未来の自分を相手にした銃撃戦に勝ち目がないことを悟った翔太郎  
は、

ロストドライバーにメタルのメモリを差し込んで、

仮面ライダーメタルに変身し、メタルシャフトによる棒術戦に持ち  
込む。

「そうだ、どんどん来い。全て砕いてくれる。お前の自信も、命も  
な」

対するディケイドは右腰に差し込んだ剣を抜き、

メタルシャフトとの鏖<sup>つば</sup>迫り合いで周囲に火花を散らす。

だがここで翔太郎の脳裏に一つの疑問が浮かぶ。

彼は”翔太郎に触れられれば消滅する”と言っていたはずだが、

ディケイドは翔太郎との剣戟でも、時々肩や手が触れるこの状況下でも、

なんら消える気配を見せないのだ。

「どうした？俺に触れたら消えるんじゃないのか」

「ただの俺ならな。だがこいつは全ての理を”破壊”する」

「じゃあ何のためにさっき説明したんだよ」

「メタル！」「マキシマムドライブ！」

——メタル・フルパワースマッシュ！

翔太郎はディケイドの隙を突き、メタルのマキシマムドライブを発動。

力任せに彼の持つ剣を弾き飛ばした。これで状況が変わると、

仮面の下でよし、と叫ぶ翔太郎だったが、

「決まったぜッ！」

「いいや、わざとだ」

メタルのマキシマムドライブで剣を弾き飛ばされたディケイドは、翔太郎のその隙を狙って彼のシャフトを奪い取り、それを振るって距離を取る。

「何しやる！」

「なあに、こうするだけだ」

ディケイドは翔太郎から奪ったメタルシャフトに念と赤黒いエネルギーを流しこむ。

瞬間、銀一色だったメタルシャフトは、青色の棒へとその形を変えてしまう。

倉田が変身したドーパントが使っていたものと、まったく同じものだ。

ディケイドは”ドラゴンロッド”に変化したシャフトを振るい、翔太郎を薙ぎ倒し、彼の首元にロッドをつきつけた。

「シャフトが変わった……って、これは倉田の！」

「そうだ。”クウガ”の力を使わせてもらった。

ディケイドはライダーたち全ての力を持った仮面ライダー。

まだまだ他にもいろいろある。目ん玉かっぴろげて、よく見てみる」

ドラゴンロッドを投げ捨てたディケイドは、胸の前で手を組み、紫色に光る大きな大きな棍棒をどこからともなく呼び出した。

マルが変身していたドーパントが使っていたものと同じものだ。

このままではまずいと、翔太郎はディケイドが放ったロッドを掴み、振りあげる棍棒を押しとどめようとするも、元々彼のものではないロッドでは、

質量も破壊力もケタ違いの棍棒を受け止めることは敵わず、

ロッドは中心から真つ二つに叩き折られ、それでも勢い止まらぬ棍棒の一撃を、

翔太郎は胸部から腹部にかけて直接受け止めてしまった。

メタルのメモリによって剛性が強化されているこの状況下であつても、

その一撃は仮面ライダーの装甲を砕き、亀裂を生じさせる。

もちろん、変身者もたまったものではない。

「く……そお……」

「どうだ？お前は……いや俺は、ツインマキシマムを使わなければ、こいつらたった一人のドーパントにすら勝てないほど弱い。理解したか？歯向かうだけ無駄だということに」

「理解はしたよ。頭ではな。けど……」

「ジョーカー！」

「JOKER！」

翔太郎はぼろぼろの体を圧して立ち上がり、  
デイクイドを睨みつけながら、ジョーカーのメモリをドライバーに  
挿し込んだ。

「俺の心は納得できねえんだよ。どうしたってそいつは吞めねえんだよ。」

俺はなあ。悪を、風都を泣かせようとするやつを……、  
体一つになったって喰らい付いてぶっ倒さなきゃならねえんだよ。  
なぜなら」

「それが『仮面ライダー』だから」、か？」

男は翔太郎の言葉を遮り、彼が言いたいことを先に答えた。  
言い返そうとする翔太郎に対し、男は人差し指を軽く振って言葉を  
続ける。

「どうして知ってるなんて野暮なことは聞くなよ。お前は俺で、俺  
はお前。」

相棒と共に誓ったあの言葉を忘れるわけがないだろうが。  
だからこそ、徹底的に潰しておく必要がある。足も腕も、体もな」

デイクイドは持っていた棍棒を投げ捨て、  
徒手空拳で向かい来る翔太郎に同じく素手で迎え撃つ。

勝てる見込みなどなかった。死ぬかも知れないと薄々感じていた。だが、それでも翔太郎は拳を蹴りを止めることはできない。

——今はもういない相棒に約束したんだ。

『お前が俺のことを相棒だと思っっているうちは二度と折れない』と。——お前はあの時、”地球がなくならない限り永遠の相棒だ”と言ってくれた。

なら、俺がここで今折れちまうのは約束破りになっちまう。してたまるか！

とはいえ、現実とはいつも非情なものである。

目の前に立つ相手が他の誰かならば、気合と度胸の力で彼は勝てただろう。

だが、今翔太郎が対峙しているのは二十年後の自分自身だ。

戦いのクセも、考え方も、奮起する理由も何もかもを知っていて、かつ戦闘能力の差は歴然ときている。勝てる理由が見当たらない。

「どうした？自慢の勇氣も、気合も度胸も種切れか？虚しいな」  
「ぐあ……あ！」

Wの半分程度の力しかない仮面ライダージョーカーが勝てるはずがなかったのだ。

拳を碎かれ蹴りを止められ、翔太郎は変身を解除してその場に突っ伏してしまう。

ディケイドはそんな彼の襟首を掴んで引っ張り上げると、

「よくもまあここまで耐えたもんだ。俺も昔はこうだったのかは知らんが。」

さよなら、俺。さよなら、何もかもが腐りきったこの街。……あばよ」

物悲しそうな声でさよならとつぶやき、翔太郎の腹部に自分の手を突っ込んで、

背中まで貫通させるのではなく、中のものを”ねじって回し”、それを外に引き出して撒き散らした。翔太郎の鮮血が赤く輝いて舞ってゆく。

ディケイドは無感情に翔太郎の体を地面に叩きつけ、背を向けた。

——寒みい……。どうしようもなく寒みい。誰かヒーターつけてくれねえかなあ。

——腹の周りだけは妙に暖かいな。どうしたんだこりゃ。

——そうか。俺はやられたのか。腹から出ているのは俺の臓器と……。

——ああいや。考えなくたって分かることだよな。やばい、マジでやばい。

——困ったな。もうすぐ死ぬってのに、走馬灯も何もあつたもんじゃねえ。

——死ぬ瞬間になると恐怖も何もなくなくなると言うが、ありゃあ本当だな。

——悪いなフィリップ。約束……。守れそうにねえや。ごめんな。

翔太郎は霞んでゆく視界と腹部を襲う地獄のような痛みの中、戦うことを、抗うことを、立ち上がることを放棄し、今はもういない相棒に謝罪をし、命の灯を消そうとゆっくりと目を閉じてゆく。

「——どうしたんだい？翔太郎」

「——まさか、あきらめるなんて、言わないよね？」

その時だったか。

血が溜まってほとんど聞こえない耳に幻聴がし、  
閉じようとしていた霞だらけの視界に偶然一本のメモリが目止ま  
った。

ディケイドと戦っていた際に、取っ組み合いで彼が落とした空のメ  
モリの一つだ。

——フィリップ？

何かあるのかと思い、生きる気力を振り絞って手を伸ばす。  
手にとってまじまじと見つめて見るが、空のメモリ以外の何物でも  
ない。

「とうとう幻覚や幻聴まで出て来やがったか」と落胆し、  
メモリを握りしめたまま再び目を閉じようとする翔太郎。  
しかし同時に彼は思案する。

——結局、まだフィリップに頼ろうとしてらあ。

——あれだけ大丈夫だ平気だって、一人でやってやるって言っ  
たのによ。

——全く情けねえよ。情けねえ。

——でも、忘れられねえよ。一人じゃ無理だ。俺にはあいつが  
必要だったんだ。

——もうこんな時になって言うのも遅いかな。

——フィリップ、お前の力が……欲しいよ——

「——仕方がないなあ。ならば貸してあげるよ。」力」を」

メモリを握る左手が異様に熱い。  
どうしたことかと首を動かし掌の中を覗く翔太郎。

「なんだ……こりゃあ」

掌の中にあつたメモリを見込んだ翔太郎はどういうことかと驚く。  
先ほどまで確かに無地で空のメモリだったそれには、  
丁度中央部分を境目にして右が緑、左が紫に塗られた、  
アルファベットの「W」が描かれていたのだ。

絵柄だけではない。鳥の羽のように軽かったそれが、  
今や握つていられないほどの熱を発し、鉛のように重い。  
持っているだけで力が溢れてくるような実感さえあつた。  
もう寝てなんかいられない。これを試す前に死んでたまるか。  
翔太郎は壁にもたれかかるようにしてゆっくりと立ち上がり、

「まだ、立つのか？俺にトドメを刺してほしいのか？」

「違う。トドメを刺されるのは俺じゃあない。お前だ」

「減らず口を。お前……いいや、俺に何ができると言うんだ？」

もはやでこぴん一発でぶつ倒れ、二度と立ち上がれそうにないお前  
に」

「そうだ、な。俺には無理だ。だが勘違いするなよ。

お前を仕留めるのは俺じゃあない。俺たちだ」

「なんだ……？その、メモリは」

——今のあれが幻聴じゃないとしたら。

——このメモリに描かれたものが”あれ”なんだとしたら。

——頼むぜ。俺に力を貸してくれ。

翔太郎は今にも意識を失いそうなほど衰弱しきつた中で、

”W”のメモリをロストドライバーに挿し込み、展開した。

「ダブル！」

—— 変身。

「W！」

その瞬間、遮蔽<sup>しゃへい</sup>した部屋の中で一迅の風が舞った。

壁に寄りかかってかろうじて立ちあがり、肩で息をする翔太郎を中心に、

どこからか吹きこむその風は、緑の光と紫の光を放ちながら次第に彼の体へと巻き付いてゆく。風がやむ頃には、

「—— やあ。」 183日ぶり”だね、翔太郎」

「ファイ…… フィリップ!!」

右側が緑で左側が黒一色。灰色のマフラーをはためかせた、風都の涙を拭う二色のハンカチ、『サイクロンジョーカー』が立っていた。

## chapter 10：Wのキセキ／帰ってきた魔少年

「サイクロンジョーカー……！」サイクロンジョーカー”だと！？馬鹿な、そんなことありえない！不可能だ！ありえない！」

自分の耐えがたい過去を語った時以上に取り乱し、ありえないを連呼するディケイド。

しかしそれはサイクロンジョーカーに変身した当人も同じである。

「これは……っていうか、お前、本当にフィリップなのか？」

「——もしかして疑っているのかい？」

こんな芸当ができる人間が僕以外にいるとでも？」

仮面ライダーWの右側の複眼が赤く光る。

フィリップの精神が翔太郎の体の中に宿り、彼がしゃべった時に起こる現象だ。

疑うつもりはないが、半年ぶりの再会に翔太郎は驚きと喜びを隠せず、

正常な判断力が欠落してしまっていたのだ。

「でも、お前が本当にフィリップだとしたら、なんでここに」

「——説明しよう。君がドライバーに挿したのは”W”のメモリ。

”仮面ライダーW”の力と能力、その全てを宿したメモリさ。

地球の記憶に記された仮面ライダーWの記述の一部を読んであげよう。

仮面ライダーWとは”心優しきハーフボイルド・左翔太郎と、脳内に地球の本棚と呼ばれるデータベースを内包する魔少年・フィリップの、

二人が、ダブルドライバーにガイアメモリを挿すことで変身する、風都を守る超人”……だそうだ」

Wの右側の半身は親指で顎を撫で、話を続ける。

「——分かるかい翔太郎。地球の記憶によれば、Wになるためには君と僕の存在が必要不可欠なんだ。

だから僕が呼ばれ、メモリの中に綴じ込まれたというわけさ」

「そういう……こと、なのか？」

「——そういうことさ」

フィリップの淡々とし、どこか楽しげな説明に翔太郎はあっけに取られ、

逆にディケイドは彼の回答に取り乱して口を挟む。

「そんな説明で納得できるか！お前は消えたはずだ！戻って来られるはずがない！信じられない！」

彼の言うことにフィリップは、Wの仮面の中で表情を曇らせ、哀しげな口調でディケイドに向かい口を開いた。

「——君だね、”未来の”翔太郎っていうのは。君のことは既に検索を終えている。

翔太郎。未来の君が見てきたものは悲惨なもので、とても耐えきれなかっただろう。

だが、二十年という長い時間を過ごす間に、僕の言葉を忘れてしまったのかい？

『僕たちは永遠に相棒だ。この地球がなくなる限り』という言葉

葉を」

「そ、それがどうだと言っんだ！」

「——君は言葉の上では納得していたんじゃないのか？」

”僕は消えたのではなく、地球の記憶と一体化”したのだと。

確かにその通りだ。僕は体のデータをなくし、地球の記憶と一体になった。

でも、自我や意思まで消えてはいない。ずっと君を見守り続けていたのさ。

だからこそ、君のその憤りや悲しみが良く分かる。……すまなかったね、翔太郎」

「この……この……ッ！」

——今更謝って何になるんだ。ふざけるな。

ディケイドは内なる怒りを抑えきれずにWに飛びかかった。

そうだ、彼の言い分は正しい。怒ってもしょうのないことだ。

フィリップは彼の気持ちを汲んだ上で、

「——翔太郎、君がそうだったのは僕の責任だ。

だが君はそのために自分の信念を捻じ曲げ、街の人たちを危険にさらした。

それを許すわけにはいかないよ」

——「ファング！」

フィリップがそう叫ぶと、緑と黒を基調としたWの体色は、

一瞬で”白一色”に変わり、鋭角的なフォームへと変質した。

全身真っ白となると、『仮面ライダーファング』とでも言うべきか。

「何ッ、”ファング”……一色!？」

「ファングジョーカー……じゃない？」

「——これは僕の個人的な”おしおき”だ。ちよつと体を借りるよ翔太郎」

フィリップは体の所有権を翔太郎から奪い、両手を地面につけて中腰になると、

まるで獣の唸り声を上げてディケイドに飛びかかった。

「くそッ、小癪<sup>コシヤク</sup>な……！」

ディケイドは飛びかかれる前に銃を構えて青色のバリア光弾を展開、

光弾に阻まれたフィリップは、釣鐘を木の棒で叩いたかのような音を響かせ、

まるで獣のようにバリア光弾に貼り付いた。

「——それで防いだつもりかい？まあい。それなら……」

——「アームファング！」

どうにも立ちいかない中でフィリップがそう叫ぶと、

ファングの両腕に鋭い刃が現れ、バリアに張り付いたまま、刃を使って強引にバリア光弾を切り裂いてゆく。

だが、バリアはトリガーのマキシマムドライブを易々と弾くほど、硬度とエネルギー純度に優れ、幾重もの層に包まれており、切り裂いても切り裂いてもなかなかディケイドに辿りつけない。

「——もう一丁、つてところかな。なら」

——「ファングトウサー！」

あと少しでバリアが剥がれそうところでフィリップは三度叫ぶと、今度はWの顔のぎざぎざとした模様が、まるで口のように開いて、鋭利な牙を生やしてバリアに噛みついた。

「——ほおら、もう到達だ」

「馬鹿な！……おおわッ！」

両腕の刃と強靱な顎の力を用いてバリアを突破したフィリップは、右腕でディケイドを切りつけ、左腕の刃で彼を押し倒し、彼の首筋に思い切り噛みついた。

ドーパントとして強化されていても、その痛みは半端なものではない。

噛みつかれ、血を噴出し苦しがるディケイドを尻目に、

彼の腹部を蹴りつけて一回転し、距離を取って着地するフィリップ。

「おい、どうなってだよフィリップ。どうして白一色になるんだ」

「——このメモリに記憶されているのは”Wのすべて”。

今まで変身に使用したメモリも、僕らの戦い方も全てだ。

その全てを自由に呼び出し、使用できるのがこのメモリの”能力”。つまり、なんでもありというわけさ」

『なんでもあり』。フィリップが戻って再びWになれた上に、メモリのチェンジを介さずになんでもできるという事実。

翔太郎は年甲斐もなく心躍らせ、やや上ずった声で言った。

「なんでもあり……ねえ。そいつは面白エ。俺にもやらせろ、フィリップ」

「——好きにしたまえ翔太郎」

「ああ。そうさせてもらっぜ。じゃあまず……」

——「ヒート!」「ヒート!」

翔太郎の気持ちを汲んだフィリップは、彼に合わせてメモリを呼称。瞬間、鋭角的な白一色だったWの体は、紅蓮に燃える赤色へと変わる。

言うなれば仮面ライダーW・”ヒートヒート”とも言うべき形態か。

「さつきはよくもやってくれたな。ガンガン行くぜ」

Wの両腕が真っ赤に燃える。悪を倒せと轟き叫ぶ。

下手をすれば自分自身をも焼きつくしてしまいそうなほどの熱量を、Wは容赦なく慈悲なくディケイドに叩きこんでゆく。

「なんて熱さだ……耐えられんッ」

「——”ヒート”の力が二倍になっているんだ。当然だろう?」

「今なら照井のやつにも勝てるかもしれねえぜ」

「おのれ……調子に乗るなよッ」

ヒートの猛攻に怒りをあらわにしたディケイドは、

大筒のビーム砲を呼び出して担ぎ、Wに極太のビームを放って翻弄。炎を自在に操るヒートは強力だが、ドライバーに挿して使っている以上、

遠距離からの攻撃を放つことは適わない。

「おっと、今度はバズーカか。つてえことは」

「——”あれ”をやるんだね翔太郎」

「あたぼうよ」

——「トリガー！」「トリガー！」

声を揃えてそう叫ぶと、今度は涼やかな青色へと体色を変え、胸部に張り付いた二丁のトリガー・マグナムを構えた。仮面ライダーW・”トリガー・トリガー”だ。

Wは相手の砲撃を左右の側転で巧みにかわしつつ、二丁のトリガー・マグナムで相手の急所を狙って確実に銃撃を与えてゆく。

用いる武器の小回りの差もあるが、二人で一人の仮面ライダーになったことで、

相手にダメージを与えられるほどのものになったことが大きい。

「——射撃はいつも君に任せていたが、これもなかなか面白いね。

さて、マキシマムで決めようか翔太郎」

「いや待て。せっかく二丁あるんだ。派手に行こうぜ派手に」

「——はは。それは面白い」

Wは二丁のトリガー・マグナムのうち、一丁の柄を真っ直ぐに伸ばし、それをもう一方のマグナムの銃口に取りつけて、

一丁の大型銃・『トリガーバスター』へと変形・合体させた。

——マキシマムドライブ！

「でかいの一発、喰らってみなよ！」

——トリガー！マキシマムバスター！

マグナムの柄で充実した青いエネルギーが、砲身から銃口に向かう中で、

緑色のエネルギーと混ざりあい、螺旋状に絡まり撃ち出されてゆく。

そのパワーはディケイドが放ったビームとかち合った末に軽々と撃ち抜き、彼の持っていた銃を粉々に砕き、溶かしてしまうほどに強大であった。

「ぐう……ッ！ だったら、こうだ！」

撃ち抜かれ吹き飛ばされたディケイドは、体勢を立て直して立ち上がると、

先ほどまで使っていた巨大な棍棒を右手に、左手に赤く燃える剣を出して、

W目掛けてそれを振るった。

「——今度は武器を用いての接近戦のようだが、どうする気だい翔太郎」

「もちろん、武器には武器だ」

——「メタル！」「メタル！」

Wは声を揃えて銀色の仮面ライダーに変身し、

二刀流メタルシャフトで棍棒と剣の両方を抑え、跳ね飛ばした。

大きさも破壊力も次元の違う棍棒の猛攻を相手にし、

Wは二本のメタルシャフトでそれをいなし、捌いてゆく。

仮面ライダーW・”メタルメタル”。

全体的な力を高めるヒートとの組み合わせには及ばないものの、

剛性も腕力も今までとはケタ違い。

直撃してもびくともせず、その衝撃を地に散らすほどの耐久性が、硬度だけなら他のどの形態よりも高いその剛性がそれを可能にしているのだ。

「今まではんぱんスパンキングしてくれた礼だ。ありがたく受け取りな！」

「――一発かましてやろう」

――マキシマムドライブ！

必殺技の発動を意味する「マキシマムドライブ」という言葉を叫んだWは、二本に連結したメタルシャフトを思い切り空に放り投げて自分も飛び上がると、空中でそれを握り、まるで器械体操選手の鉄棒競技のように激しく回転し、傍目から見ると風都タワーの”風車の羽”のような状態となった。

――メタル！ウィンドミルスマッシュ！

回転による加速力が頂点に達した瞬間、勢いをつけて手を離し、その勢いに乗せてディケイドに強烈な飛び蹴りを見舞った。防ごうと構えた棍棒を粉々に砕き、その上でディケイドを地表に叩きつけ、

彼の呼吸を数秒止めてしまうほどに強烈な一撃であった。

「ぐ……おお……っ」

「――翔太郎、どうするつもり？」

「もちろん、メモリブレイクだ。俺たちの”切り札”でな」

「――切り札、か。いいよ。行こうか」

「ああ、行かせてもらっぜ」

――「サイクロン！」「ジョーカー！」

同時に掛け声を上げ、今一度マフラーはためくサイクロンジョーカーに変身。

今まで使うことのなかったWのメモリを腰のマキシマムスロットにセット。

仮面ライダーダブル最強の必殺技を発動するために。

「ダブル!」「マキシマムドライブ!」

ロストドライバーから大量の風が巻き起こる。

巻き起こった風は周囲のものを巻き込むだけ巻き込んで散らし、部屋の天井を突き抜けるほど大きな一つの嵐となった。

Wは風の中に自分の体を巻き込み、はるか頭上へと飛び上がると、

「これで!」「決まりだ!」

——ジョーカーエクストリーム!!

Wは膝をついて立ち上がれずにいるデイケイドに向かい、

吹き上がる風の勢いを借りて、中央の白線を境にして二つに分割し、双方が双方共に強烈な飛び蹴りを見舞う。

W・サイクロンジョーカーの必殺技、「ジョーカーエクストリーム」だ。

それまで数多くの技を受け続けて限界に来ていたデイケイドの体は、ジョーカーエクストリームの一撃を受けたことであとう崩壊し、派手な爆発と共に、ひとりでにメモリを排出して砕けていった。

「終わり……なのか」

「——ああ。僕たちの勝利だ、翔太郎」

攻撃を受け、”ディケイド”と”リベンジ”のメモリを破壊された男は、

仰向けになって倒れたまま起き上がることができなかった。

それだけではない。彼の体は徐々に嫌な音を立てて崩れて来ている。

「これは……」

「——彼のことは既に検索を終えている。

強力かつ粗悪なメモリを行使した副作用だ。

おそらく僕たちが手を下さなくても、近いうちにこうなっていただろう」

男が使用していたのはミュージアムが消えた後、  
極秘裏に、正式なライセンスを所持していないどこかの組織が造った粗悪品。

それを同時に二本も直挿ししているとすれば、むしろこの結果は当然である。

フィリップはそれを知っていたのだ。

Wは倒れ込み、そこから一步も動くことのできずに、  
しゃがれた声で力なくつぶやく男の元に駆け寄った。

「フィリップ……俺は……」

「——ありがとう、翔太郎。君には本当に感謝している。

君が来てくれたおかげで、僕たちは未来を知ることができた。

もう大丈夫だよ。君の見てきたことは絶対に起こらないし、起こさせない。

それは君自身が一番知っていること、だろう？」

フィリップの優しいげな声と言葉に、男は顔をしかめてつぶやいた。

「いろんなものを失って、少しは何か変わったかと思ってたが、結局俺は何も変わってはいなかったんだな。一人で馬鹿やって、その結果を相棒にたしなめられてうなだれる。いつも通りのハーフボイルドだ」

自身をなくして頭を垂れる男に、フィリップはある言葉を口にした。この男の師が自分に伝え、自分もかつての彼を奮起させるために話したあの言葉を。

「——完璧な人間などいない。互いに支え合って生きてゆくのが、人生というゲーム。」

だからこそ……すまない、翔太郎。君一人だけに辛いことを背負わせてしまった。

どれだけ謝っても償えることじゃない。僕は……相棒、失格だね」  
「何を言ってるんだ。こうして俺の前に現れてくれたじゃないか。俺にとってはそれで十分さ。ありがとう、フィリップ」

男はフィリップに感謝し、にこやかな顔で礼を言った。  
そして、それと同時に彼の顔から生気が消えうせ、体全体に亀裂が走ってゆく。時間が来たのだ。

「——消えるんだね」

「もう後悔も痛みもねえ。不思議なもんだな、死ぬってというのは」

男はWの左手をゆっくりと握って穏やかな口調で続ける。

「俺を止めてくれて……ああいや、街を守ってくれてありがとう。後のことはお前に任せる。頑張れよ、昔の俺」

「ああ。照井も亜樹子もみんなも……絶対に死なせない。」

”この街は腐ってる”なんて絶対に言わせない。だから……」

涙声でそう話す翔太郎の、Wの左側に、男はそつと人差し指を当てて言った。

自分のことは自分が一番よく分かる。何が言いたいかはお見通しのだろう。

そして、その言葉がこの場や自分たちにとってふさわしくないと言うことも。

「言うな。それこそ野暮つてもんだ。……あばよ、フィリップ」

「——ああ。安心して逝きたまえ翔太郎。さらばだ」

男は自分の過去と最高の相棒に看取られ、黄泉の世界へと旅立つてゆく。

どこまでもにこやかで、恐怖も痛みも微塵も見せない穏やかな表情だった。

彼の体は古くなった木の皮のようにぱらぱらとめくれ、

欠片となり粉となり塵となり、自らが愛した風都の風にさらわれていった。

## chapter 10：Wのキセキ／帰ってきた魔少年（後書き）

ここまで本小説をお読みくださって、本当にありがとうございます。  
正直ここ数話は皆さまを落胆させてしまっただろうと思いつつ、  
自分のやりたいことがやりたい！という気持ちを先行して、  
ただひたすら書いていました。強引というかアレというか。

なお、本作品は次回の話で終了となります。

## chapter 11：Wのキセキ／風の都の贈りもの

―― 絶望が、お前たちのゴールだ。

―― 「トリアル！」「マキシマムドライブ！」

「こんな……こんな終わり方って、ありかよッ」

「もっと、活躍したかった……ッ！」

時間は十分ほど遡り、小島の入江を抜けた野原の上。

アクセルトリアルに変身した照井は、

加賀の腹部をエンジンブレードで細やかに正確に刺し貫き、鷹村の胸部を必殺のマシンガンスパイクで蹴り碎いていた。

二人はメモリの位置を正確に突かれて爆発し、

しゃがれたうめき声を上げて地面に突っ伏した。

「これで終わり、か」

「すっごーい、さすが竜くん！ホレちやいそう！」

「なんだ？既に惚れているんじゃないのか」

「うっん、うそうそ！今も昔もあたしは竜くんにベタ惚れ！」

などと、照井と亜樹子が傍から見れば薄ら寒い会話を交わしていた中、

彼らの眼前のビルから大きな竜巻が飛び出した。

竜巻で開いた穴から仮面ライダーが顔を出し、

中に向かって飛びこんでいるではないか。

「竜くん！翔太郎君が」

「ああ、急ぐぞ亜樹子」

二人は竜巻の舞う倒壊したビルの中へと足を踏み入れてゆく。

「あつ、竜くん！いた！翔太郎君いたよ！」

「左イ！大丈夫か！」

そして、現在。

部屋に駆け付けた亜樹子と照井が見たものは、帽子とコートだけを残して塵となった黒幕と、部屋の奥で膝をついて安心してうなだれる翔太郎の姿だった。

「どうしたの？どうかしたの翔太郎君！」

「左、しっかりしろ、左！」

二人は放心した翔太郎の肩を揺するが、反応がない。

出血は既に止まっているが、腹部が赤黒く染まっていることもあり、動かない翔太郎に肩を貸し、二人はこの場所から彼を運び出そうとする。

「また会おう」、「また会おう」……か。はは、ははは……。

そうか、そうか……さよならじゃ、さよならじゃ、ないんだな……」

「翔太郎君、どうかしちやったのかな」

「敵には勝ったようだが……精神疾患でも受けたのか」

「誰が精神疾患だ、誰が！」

生気を失ってうなだれる翔太郎の顔を見て、照井は皮肉交じりにそう言うが、

それを聞いた翔太郎はそんなわけあるかと顔を振り上げて答えた。

「おわつ、翔太郎君！」

「平気なら平気だとすぐに言え」

翔太郎はこんなものいらんと肩を貸す二人を払うと、自慢のソフト帽を被り直し、晴れやかな顔で答えた。

「もう終わった。あいつがこの街に現れることはない。

それよりも照井、悪かったな。お前に二人も押し付けて」

「気にするな。大した手間ではなかった」

「ね、ね。結局あの黒幕って、どんなやつだったの？」

「やっぱり、風都が嫌い、こんな街なんか壊れてしまえーって言うような？」

亜樹子の問いに、翔太郎はそれは違うと首を振って答える。

「いいや。その逆さ。あいつは誰よりも風都を愛していたよ。

愛しすぎたからこそこうなった。愛しすぎたからこそ傷つけた。

あいつも、街も、誰も悪くなかったんだ」

亜樹子と照井は、翔太郎がなにを言っているのかさっぱり分からなかった。

もちろん、翔太郎もそうだろうなと思ってはいた。

これ以上説明する意味はないだろうと思い、隠したのだ。

翔太郎は塞がったとはいえまだ痛む腹部の傷口を押さえながら、ゆっくりとその場を出て行った。

—— ありがとう。未来の俺。そして、大好きなこの街。そう、誰に聞こえないようにつぶやいて。

今回の事件の首謀者、二十年後の左翔太郎の最期を見届けた二人は、壁にもたれかかってその場に座り込んだ。

データ人間であるフィリップは別だが、翔太郎はツインマキシマムを行った上に、

相手に内臓をかき混ぜられ、瀕死の重傷の中戦っていたのだ。

仮面ライダーの姿でも疲労はピークに達していたのである。

「なあフィリップ」

「——なんだい、翔太郎」

「このメモリさ、なんで俺のところに来たんだろうな。

まさか、お前が自分の意思で助けに来てくれたのかな、って思っ  
てよ」

「——僕個人の力でメモリの中に意識を綴じ込められるのなら、  
君に言われるまでもなくとくにやっているさ。僕じゃない」

「じゃあ誰が」

仮面ライダーWの右腕は、顎の上に指を乗せて少し考えてから答える。

「——これはあくまで僕の推論だが、”街”の仕業なんじゃないか  
な」

「街？風都がやった……って言いたいのか？」

Wの右半身は穴の開いた部屋の外から、

半分だけ修復された風都タワーを眺めしみじみと口を開いた。

「——『自分の力でひたすら頑張って頑張って頑張って、

それでもどうにもならなくなったとき、彼はその勇気と努力を称えるため現れ、  
圧倒的な力で世界を救う』。ある本の中に記述されていた”英雄”の話さ。

君は僕がいなくなっても一人で仮面ライダーを続けて……、  
ああいや、照井竜も一緒だったね。それはそれとしてだ。  
それでもどうにもならない状況が起きた。未来の君が起こしたこの事件。

明確な悪意と復讐の念を持って犯罪者を解放し、街を泣かせようとしていた。

だが君と君の仲間たちはあきらめなかった。街を守るため、  
身を粉にして死ぬ思いで自分よりもはるかに格上の相手と戦い続けた。  
ずっと街のために戦い続けた戦士のために、街が起こしてくれた奇跡。

……非論理的だが、それが一番しっくりくる答えだ」

——”奇跡”、か。

それが本当ならどれだけ素敵なことだろう。

翔太郎は嬉しさと気恥ずかしさに少し顔をすくめた。

「そりゃありがたいが。でも、これでますます死ねなくなっただけな。街に助けられたんなら、一生かけて恩返ししなきゃ釣り合わねえ。これから頑張ろうな、俺たち二人で一人の仮面ライダーだしよ」

「——ああ、翔太郎？実はすごく……言いにくいことなんだが」  
「なんだよ」

申し訳なさそうにそう言つて、Wの右半身は腹部のロストドライバーを指差した。

これは、一体どうしたことだろう。

「メモリが……、消えかけてる！」

仮面ライダーダブルの記憶を宿したメモリは、役目を終えたとしても言わんばかりに色身を失い、ばらばらと崩れ、消えかけていたのだ。

「フィリップ、これは一体……」

「——僕たちは二人で一人。」

そして数多くのメモリを用いていくつもの形態を駆使し、戦った。だからこそ、どんな相手にも勝利してこれたし、何より強かった。だが、そのせいで内包される記憶がメモリの容量を超えてしまったのさ。

それをロストドライバーという単一のドライバーで行使したんだ。耐えられるはずがない」

フィリップはメモリを引き抜こうと右手を伸ばすが、左腕はそれを許さず抑え込む。

このメモリには地球の記憶が呼びこんだフィリップのデータが詰まっている。

それを引き抜いて変身解除をするということがどういうことが、翔太郎が理解できないはずがない。

「待て！待ってくれよフィリップ……、抜かなくてもいい方法だつて」

「——ダメだ。これは今抜かなくてはいけない。見たまえ翔太郎。メモリの膨大な情報量に、ドライバーが悲鳴を上げている。」

このままでは、メモリはおろかドライバーまで使い物にならなくなってしまう」

メモリの過剰使用にロストドライバーが火花を散らしている。

このまま挿し続けられれば間違いなく壊れてしまうだろう。

翔太郎は今や風都の涙を拭う仮面ライダーのひとりだ。

彼がいなくなってしまうことをフィリップは何よりも恐れていたのである。

最初から予期できていたことのはずだ。

再会できるはずがないと。また一緒に探偵が出来る筈がないと。

だが、もう翔太郎はあきらめられなかった。

「俺は気付いたんだよ。どんなにやせ我慢して頑張っても、結局はお前がいなきゃ俺は何も出来ない。ダメな奴なんだよ。このままじゃ俺は……、あいつと同じになってしまう。」

あいつみたいに大好きな風都のことを壊そうとしてしまうかもしれない。

なあ、頼むよフィリップ、行かないでくれよ」

再び相棒を失いたくないとまくしたてる相棒の泣きごとを、フィリップは蔑むことも馬鹿にすることもなく言葉を返す。

「——翔太郎、君は弱くもダメな奴でもない。」

君は自分を、人間が乗り越えるべき最強にして最大の存在を乗り越えた。

何を恐れる必要があるんだ。君はもはやだれよりも強いじゃないか」

「それは！お前が、お前がいてくれたから……」

「——僕は何もしていない。僕が今ここにいるのは、

どんなにぼろぼろになっても、どんなに辛い目に遭っても、  
やせ我慢をして痛みや涙をこらえて戦ってきた君に、街がくれたご  
褒美だ。

君は君自身の力で、僕を地球の記憶から引つ張り出したんだ。  
それは僕にはできない、君だからできるすごいことなんだよ。翔太  
郎」

「——アキちゃんや照井竜、それと……、母さん。  
街のみんなには君からよろしく言っておいてくれ。  
また会おう、相棒」

——待ってくれ！フィリップ！

Wの右半身は、自身の手を押さえつける左手をさつと振り払うと、  
ロストドライバーから「Wのメモリ」を勢いよく引き抜いた。  
メモリは塵となり粉となり、Wの変身解除の際に生じた緩やかな風  
に舞い、

風都の風となつて還つて行く。

翔太郎は何も言えないまま、膝をついてその場になだれた。

「あつ、竜くん！いた！翔太郎君いたよ！」  
「左イ！大丈夫か！」

## chapter 11：Wのキセキ／風の都の贈りもの（後書き）

色々思うことがあって、文章をエピソードとそうでないものに分割しました。

それでは、最後のエピソードをどうぞ。

そして月日は流れ、さらに半年後。

2011年8月28日。うだるような暑さの日曜日。  
まだ日も昇り切りらない早朝に、探偵・左翔太郎は――

―― ラジオをお聞きの風都市民のみなさん、おはようございます。  
す。

―― それでは参りましょう。ラジオ体操第一！

「はいっ、おいつちにい、さんしっ！おいつちにい、さんしっ！」

「おにーちゃん、暑苦しいよー」

「もうちよつと静かにやろーよー」

「馬鹿野郎！ここで頑張らないでいつ頑張る！」

ラジオ体操は夏のうだるような暑さを乗り切るためにやるもんです！  
ここで気を抜いていたら日中の暑さにはとても耐えられないんです  
！」

完全に修復された風都タワーが良く見える風都公園で、  
いつものソフト帽に縞の入ったYシャツに黒のベストを身に纏い、  
子どもに混ざって「夏のラジオ体操」に精を出していた。

「はいっ、左さん。すごいねー、今日までパーフェクトかぁ」

「いやぁ、風都市民として当然すよ」

「いやそうじゃなくて、他に行くところないんですか？」

「余計な御世話だッ」

スタンプ捺印係の人に白い目で見られつつも、  
参加者スタンプをカードに押す翔太郎。

よく見ると”あと少しで皆勤で賞”という所に来ていた。

「おい、おっちゃん、おっちゃん！見ろよこれ！

賞だぜ！”あと少しで皆勤で賞”だぜ！ほら、ほらっ！”

「おやおや。子どもたちよりも先にこれに到達する方がいらっしやるとは。

分かりました。どうぞ、お受け取りください」

係員のおじさんはやや嫌味な口調で、

本来勤勉な子どもに渡すはずだった商品を翔太郎に手渡す。

風都の有名なおもちゃ造形メーカーが特注で作った、  
一抱えもある大きな大きな「サイクロンジョーカー」のビックマス  
クダ。

「うわぁ！すごい！すごい！」

「いいなー、いいなー。仮面ライダーのマスクだ！」

「ねえおじちゃん、ぼくたちにもちょうだいよ」

「だーめーだ。これはラジオ体操という苦行を、

毎日欠かさず続け、スタンプを押し続けた者だけが得られるご褒美。  
君たちみたいに途中でサボって抜け出した子たちには渡せねえな」

「ええー？」

「おじちゃんのけちー！」

「はッ、悔しかったらお前たちも来年からは毎日出席することだな！  
それと、俺はおじちゃんじゃねえ、お兄さんだ」

翔太郎は子どもたちがぶうぶうと文句を垂れる中、ビクマスクの箱を抱え、高笑いをして公園から出て行ったのだが、

——何あにしてんねん！

「おごあ！あ……亜樹子オ！」

背後から音も立てずに近寄ってきた亜樹子に、

「ガキ大将か！」と描かれたスリッパで後頭部を叩かれて倒れ込んでしまった。

「いっつも気だるい朝だとか言ってる奴が毎朝どこに言っているかと思ったら！」

「っていうかそんなの子どもに渡してあげなさいよ」

「嫌だね！こいつは最初から最後まで参加したものの努力を称えるものだ！」

途中でサボタージュしたようなやつらに渡せるもんか！」

「いい歳して……子どもかッ！」

亜樹子のスリッパの猛攻に耐えかね、

翔太郎は子どもたちよりも早く公園を去って行った。

子どもたちの冷たい視線と、『あんな大人にはなりたくないよね』、という陰口がどうにもこうにも翔太郎の痛いところを突いてならなかった。

「傷の具合はどう？ほら、あの半年前の」

「何針か縫っちまったが、もう塞がってる。問題ねえよ」

「そっか」

それから数十分後。二人はようやく落ち着きを取り戻すと、風都タワーを眼前に見込み、一年前のことを思い出していた。心地よい風が二人の頬を優しく撫で、当てもなく去ってゆく。

「そういえば、今日でもう一年だね」

「何がだ」

「フィリップ君が……消えてから」

何の気なしに亜樹子の口から漏れ出た一言。

彼女の言葉に翔太郎は被っていたソフト帽を押さえて答える。

目元の哀しみや冷たさを隠すためではなく、しみじみと思いだすために。

「だな。……そうだ。久々にあの場所に花でも持っていくか」

「翔太郎君、変わったね」

「何がだ？」

”昔は話すらしたがいなかったのに”。そう亜樹子は付け加えようとしたが、

彼のにこやかで穏やかな表情を見て言葉を喉もとで呑みこみ、静かに微笑んだ。

「あ。じゃあさ。帰りにあれ買ってきてよ」

「あれ？」

「ミツクの餌。そろそろ切れかかってたし。

”レジェンド・デリシャス・ゴールドン”。あの子、それしか食べないから」

「ああ。あれすぐに在庫切れするんだよね……。サンタちゃんこのペットシヨップ、

ちゃんと入荷してるかどうか後で電話しておくか」

「そっか。じゃあ、ここで。竜くんにお弁当届けてくる」

「おう、お前も頑張れよ」

翔太郎は『またたこ焼きか』という言葉を呑みこみ、軽く手を振って亜希子を見送った。

彼は公園から住宅街へと歩を進め、風都タワーを見上げて物思いにふける。

——あれから、もう一年。ああいや、半年か。

——色々あったが、今では割と落ち着いてる。

——あの時、お前の言葉があったから、かな。

翔太郎はあの時、相棒が自分に残した言葉を咀嚼するようにつぶやく。

——お前はあの時、『また会おう』と言ってくれた。

——“さよなら”じゃなくて、“また会おう”と。

——俺がこの街を守っている間に、お前も何か『手段』を見つけたんだな？

——そうなんだろう？ フィリップ。

雲ひとつなく澄み渡った夏の青空を見上げ、翔太郎は拳を握りしめた。

——もう泣き言は言わない。絶対にあきらめたりしない。

お前が帰ってくるその日まで、俺はずっとこの街で悪と戦い続けるさ。

——覚悟しろよフィリップ。俺は絶対に負けない。絶対に死な

ない。

お前の腹の立つその顔に一発入れてやるまではな。  
待ってるよ、フィリップ――

「――はは、そいつは怖いな」

住宅街の風見鶏に交じり、緑色の小さなおもちゃのような鳥は、  
物思いにふける翔太郎を見届けると、  
風都の風にさらわれて当てもなくどこかへと飛び去って行った。

（了）

e p i l o g u e ・永遠のE／この街に正義の花束を ・プロローグ（後書き）

今までお読みくださって本当にありがとうございました。

近日中に総括の”あとがき”を掲載しますので、

最後の最後までお付き合いくださいませませ。

## さいごに

「仮面ライダーW Rの脅威／帰って来てくれ仮面ライダー」。数あるWの二次創作作品の中から本作を選び、最後までお読みいただいて、まことにありがとうございました。

最終的に「Wの48話に感銘を受け」、その中で描かれる空白の時間を補完しようと

この小説の制作に踏み切ったのですが、  
そもそもこの文章を書こうと思ったきっかけは、  
ガチャポンや食玩などで販売されている「仮面ライダーのメモリ」を、

人間が直挿ししたり、ドライバーに入れて使ったらどうなるか？  
ということがやりたかっただけでした。

ゆえに、書き出し（というか構想を練っていた先週の月曜日時点）では、

本気で「他の仮面ライダーとのクロスにしよう！」と話を練っていた、

・ラスボスは”彼”ではなく、”どこかの世界であぶれた門矢士”で、

彼の持つ”デイケイド”のメモリが9つのライダーのメモリを形作り、

風都の犯罪者たちに与えた

・クウガ・ドーパントは登場せず、代わりに『小野寺ユウスケ』が、  
ドーパントのフリをして登場した後、翔太郎たちと共に闘う  
……という流れに持っていくつもりだったんですね。

実際に執筆を開始する前日まではこの二つを柱にして、全体の構想を練っていたのですが、

先週の火曜日の時点で” ipp そのことWの後日談にすればいいじゃん”と、

頭の中が突然スパークして、アイデアが湯水のように溢れ出てしま  
い、

結局一日で全ての構想と流れをリセットし、現在の形に組み直しました。

結果としてそれが最善の選択だと思っているのですが、そのせいで常に” ネタねえよ！”と発狂しながら作らざるを得ず、一つやりたいことを達成するために毎回ひいひい言いながら作っていました。

他の拙作を読む、というかその掲載感覚を見ていただければ分かる通り、

自分はあまりばんばんと書きを書けるような器用な人間ではございません。

そのため” 毎日一回更新する！”という締切まで定め、

かつ、様々な方にお気に入り登録していただき、

評価までしていただいた日にはもう、いつ投げ出すか分からないほどの

なんかもうろくでもないプレッシャーに苛まれていたんですね。

Wの48、49話が平成ライダー作品としては、綺麗に風呂敷を畳んだだけに。

今でもよく書き上がったなあと自分を素直に褒めたくります。

一応「最終回までの補完」を目指して制作した一作なのですが、  
・シユラウドが半年後も生きてる（死亡時期は明確ではないが確実に夏）

・照井は亜樹子のことを名前で呼ばない

・フィリップに対して、一番最初に言うべき若菜姫のことについて全く触れない翔太郎

・ソウルメモリを所持し、ツインマキシマムに使う仮面ライダー

など、色々矛盾しちゃいけない部分が矛盾してしまい、

途中で「丸々書き直すか？」どうかと入らぬ悩みを抱えたりもしました。

時間がなかったのであえて”パラレルです”なニュアンスでお茶を濁して、

そのまんま終わらせてしまいました。

一応申し訳程度に”はじめに”に但し書きを記してあるのですが、  
そういう意図で本作品を読まれた方にはこの場を借りてお詫びいたします。

あとはもうとにかく、「仮面ライダーW」の体裁を借りて、  
自分の好きなことをやれるだけ、やれる範囲でやってしまった感じでしょうか。

本当はビークルとか全部使い切る予定もなかったし、  
トリガートリガーとかメタルメタルなんてものも出す予定はありませんでした。

（最終戦についてはWの最終回よろしく、  
基本三フォームだけで終わらせるつもりでしたし）

そついう意味では辛かったけど、楽しい作業ではありました。たぶん。

全て書き終わって一度寝て、起きてすぐに書いた後書きですが、とりあえずはこれぐらいでしようか。

また何かありましたら感想や活動記録やここの改定を持って追記します。

本作品もこれにて一件落着。

二か月近くもかけて行うはずの作業を9日（実質8日）でやりました。

当分振っても揺すっても何も出ないかと思えますw

燃え尽きました。

おまけ：各種Rドーパント設定その他雑多なものとめ（前書き）

ご注意

これ以降の文章は本作品のネタバレを多分に含みます。  
なるべく本編をお読みになってからご覧ください。

## おまけ：各種Rドーパント設定その他雑多なものとめ

本小説完結から一週間。仮面ライダー〇〇〇放送開始から一週間弱。ありがたいことで本小説も様々な方からご好評をいただき、かつ、タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！に衝撃を受けた人多数のこの一週間。

あれが始まる前にきちんと終わらせておいて本当に良かったと心から思います。

と、いうわけで。なにが”というわけ”なのかさっぱりではありませんが、

今まで突貫工事で済ませていたいくつかの設定について言及しようかと。

”ああ、あれはそういう効果だったのね”ぐらいに思って読んでくだされませ。

### Rドーパント

#### ●クウガ・ドーパント

倉田剣児が変身した『クウガの記憶』を宿すドーパント。

見てくれはSICのクウガのようなものに、腰巻きをつけてグロングリっぽくした感じ。

能力は自分の体についた装飾品やその他雑貨物を武器にするもの。

ガラスのように尖ったものはナイフに、棒はロッドに。

銃からは弾丸が入っていなくても殺傷力の高い空気圧弾が飛び、身体能力も非常に高い。

服役してメモリの毒を抜いている最中だったが、それでもメモリの魔力に取りつかれたかわいそうな人。

構想当初はクウガドーパントなんてものを出すつもりはなく、『ドーパントの振りをして解決に手を貸す』小野寺ユウスケ”にしようかと思いましたが、全体の構想がまとまってから立ち消えになりました。

後述。

#### ●デンオウ・ドーパント

稲本弾悟17歳が変身。『電王の記憶』を宿す。本編では弾悟の性格からか”ダンスの得意な”ガンフォームに特化し、

デザインも顔がガンフォームのものそのまま。

ただし足や肩や腕に三フォームの意匠が残っている。

戦意がなく、なりたくなっただけではないため戦闘能力は著しく低い。

#### ●キバ・ドーパント

雪村姫香が変身。『キバの記憶』を宿す（牙の記憶”ファングにあらず）。

クウガと同じくSICのあれみたいなイメージ。

周囲を闇に染めたり、顎の牙で人の命を摺って糧に出来たりするも、稲本弾悟17歳と同じ理由で未使用。

”ゾーン”とか”ティーレックス”とか、

Wでは女性であることを前提としたデザインのクリーチャーが少ないので、

腰回りがどうか腕や足の細さなどは聞いてはならない。

●カブト・ドーパント

伊刈（劇中便宜上”透”<sup>といちる</sup>）という名前が付いていますが省略）が変身。

アクセルトライアルのトップスピードとほぼ同等の高速移動能力を持ち、

その上で甲虫らしく外装も堅く、半端な攻撃では傷も付かない。

しかしその分大仰な武装は皆無で、武器は腰に差したクナイのみ。

ドーパント態が『甲虫』『高速移動』と、

能力がいい感じに被っていたので犯人群の中で真っ先に変身者が決まりました。

アクセルのマキシマムドライブはこっちで使ってあげたかったので、

強すぎていっぱいいっぱいというところを見せたかったのであえてカット。

●ヒビキ・ドーパント

有馬丸男<sup>マル</sup>が変身したドーパント。

体長3メートル弱ほどでかなりの大柄。

『ディケイド』の”牛鬼”の手足を伸ばして響鬼に近付けたイメージ。

音撃棒はあっても音撃鼓はありません。ディスクアニマルもいません。

『クウガ』がモーフィングパワーに特化したドーパントになったので、

こっちは”鬼”らしく馬鹿力で棍棒を振り回すイメージで統一。叩いて清める必要性がないので音撃は相手の体を狂わせる能力で。

本編のヒビキさんは『超再生能力』というほど超速で再生しませんが、

ビーストのメモリの再生能力と被るなあ、という理由で採用。いい加減に見えてある程度共通項を探しながら書いてました。

#### ●リュウキ・ドーパント

津村真里奈が変身したドーパント。

SICのあれに獣の口やら爪やらがついて前傾姿勢になった感じで

両肩に赤龍ドラグレッダーと黒龍ドラグブロッカーを宿し、必要に応じて呼び出し、援護を行わせることが可能。

暴走すると首が伸びて牙が生え、龍に近い風貌へと変化し、

キングギドラやデスギドラを彷彿とさせる三つ首の怪物へと変貌。

当初の構想ではここでドーパントとの戦いを終わらせるつもりだったので、

最後の最後で気合入れようぜ、ということとで巨大化。

書きだした当初はリボルギャリーやアクセルガンナー、ハードなんかを全て総動員してようやく撃破……なんてことはせず、

必要最低限の装備で終わらせようとしたのですが、それだと面白みに欠けるよね、という理由で書き直しました。

キングギドラはともかくデスギドラが分からない人は、とりあえずお父さんやお母さんに聞いてみよう！

●ファイズ・ドーパント

加賀泰造が変身するドーパント。

本家本元がコンパクトな武装をテクニカルに使うライダーだったので、

こっちはあえてビーム砲とかでつかいパンチングユニットとか、携帯するのに不便そうなものをセレクト。

意外とメカメカしいものも多いドーパントデザインなので、

いちいち修正を加えずともS I Cのものを想像していただければ分かりやすいか。

選定理由は加賀自身がカジノ経営者で、使うなら高そうなもの……、  
ああ、携帯電話とかその他周辺機器とかは高そうだなーという安着なものの。

結構苦しくなってきました。

●ブレイド・ドーパント

鷹村源蔵が変身するドーパント。

カブトとの差別化及び『カブトムシ』という生物特性を活かして、六本腕全部に刃を持ってチャンバラをするような形になりました。

『グレンラガン』のエンキラッガーとか、

『ロックマンゼロ』の中ボス”アスラ・バスラ”みたいなイメージで。

加賀と鷹村、ファイズとブレイドのドーパントは当初出すつもりがなく、

後述のアギトと共に翔太郎が変身する前にメモリブレイクをするつ

もりだったのですが、  
終盤の展開上あそこで照井を亜樹子を押しとどめておく必然性が出てきたため、

急きょデザインイメージを設定して登用しました。

最初から戦闘シーンを書くつもりがなかったので特殊な能力がありません。

#### ●アギト・ドーパント

メモリのみ登場。使用されことなく翔太郎にブレイクされた。ライダーごとの能力の差別化がかなり厳しくなってきたおり、かつ翔太郎に恨みを持ってそんな犯人がこれ以上思いつかなかったのもので、

仕方なくメモリだけ出してカットということにしました。

（ジュエルの人とかは素質ありますがそれこそ共通点ないし）

変身していたらおそらく金色のアナザーアギトのようになっていたことでしょう。

#### ●ディケイド・ドーパント

とある人物が変身したドーパント。『仮面ライダーディケイド』の記憶を宿したメモリ。

ソード・ガンなどの武装を忠実に再現しているだけでなく、

今まで戦ってきたRドーパント全ての能力を行使できる。

逆に、それらドーパントへの変身能力はない。なぜかディエンドのバリア光弾も使える。

劇中最強のドーパント。

当初は彼の正体も『とある人物』ではなく、

並行世界のどこからやってきた『門矢士』が変身するデイケイドでした。  
が、それでは”どうやってライダーのガイアメモリを出すんだよ”という、  
素朴な疑問に答えを出せなくなったので構成を全部書き直してあ  
なりました。

## その他の設定

### ・仮面ライダーW

フィリップの消滅により変身できなくなったものの、  
空のメモリに『Wの記憶』が宿ったことで生まれた『Wのメモリ』  
を使って変身。

仮面ライダーW全ての能力及び記憶を宿しており、  
単一のメモリを用いロストドライバーで変身している関係上、  
二人の掛け声を合わせるだけでハーフチェンジを行える。

また最大の特徴として、『二人が同時に同じメモリの能力を使え』、  
W本編では考えられなかった『同じメモリ二つでの変身』も可能。  
その上従来通り単一のメモリだけの変身も可能なため、  
変身のバリエーションは本編の倍以上。

### ●仮面ライダーフアンゲ

翔太郎の体を借りてフィリップの意思で変身した姿。白一色。  
フアンゲジョーカーを完全に白一色にしたイメージ。

両足両腕に爪が生えただけでなく、  
新たに強靱な顎と牙『フアンゲトウサー』を獲得。

ジョーカーがないため獣の力に最大限に特化した形態といえる。

● 仮面ライダーW ヒートヒート

ヒートメモリ二本で変身したのと同意の形態。赤一色。

ソウルメモリ二つ合わせによる変身のためマキシマムドライブは発動できないが、

アクセル・エンジンメモリの熱量をも超える熱エネルギーを使役できる。

● 仮面ライダーW トリガートリガー

トリガーメモリ二本で変身したのと同意の形態。青一色。

ルナ・サイクロン・ヒートのメモリの力による属性付加が出来ない代わりに、

専用銃『トリガーマグナム』が二丁装備され、

それを組み合わせると事で数倍の威力を持つ『トリガーバスター』へと換装できる。

マキシマムドライブは青と緑のエネルギーが螺旋状に絡まり合って放たれる、

『トリガーマキシマムバスター』。

● 仮面ライダーW メタルメタル

メタルメモリ二本で変身したのと同意の形態。銀一色。

メタルシャフト二刀流が可能となり、パワーも全フォーム中最高。

剛性は言わずものがなで、ヒビキの棍棒が直撃してもびくともしない。

マキシマムドライブは二本のシャフトを連結させて空に放り、それに掴まり鉄棒を使った器械体操の要領で激しく回転しつつ、その勢いを借りて放つドロップキック『メタルウィンドミルスマッシュ』。

シャフトに掴まりくるくる回転する様を風車に見立てて名づけたものの。

というよりもXライダーのXキックのパロディー。

ちなみに『サイクロン』と『ルナ』が欠番なのは、

CCはMovie大戦2010で既に使用されていること、

LLはカタカナ表記で『ルナルナ』となり、なんかかわいいなと思った……。

というよりも”ルナは半身が異常に伸びたり縮んだりするから面白い”のであって、  
両方が伸びたり縮んだりすると面白みに欠けるなあ、という個人的な理由から。

## ・メモリ

### ●タイムメモリ

『時間の記憶』を宿したメモリ。とある人物が過去に戻る際に使用。あくまで”記憶”であるため、”未来”に行くことはできない。

タイム・ドープントは自分の生命エネルギーを消費することで、過去を自在に行き来することができる。

これを使用した人物は20年前の世界に来た時点で、ほとんど生命エネルギーが尽きかけていた。

財団でもミュージアムでもない誰かが、  
かつての組織の技術を用いて制作した『できそこない』のメモリ。

●リベンジメモリ

『復讐の記憶』を宿したメモリ。あらゆる『復讐の念』を内包しており、

挿してドーパントに変身できない代わりに、空のガイアメモリに挿して使うことで、

復讐の念に駆られた人物や怪物などの記憶を注ぎ込むことができる。

この作品における”R”は全て”リベンジ”の”R”。

作中犯人たちが使用したメモリには、”とある大戦で戦死したライダーたち”

の復讐の念が込められた、言わば『リベンジ・ドーパント』である。

物語の黒幕はこの能力を使用するために複数の空メモリを所持していたが、

そのうちの 하나가Wのメモリを生み出すきっかけにもなった。

おまけ：各種Rドーパント設定その他雑多なものとめ（後書き）

風の佐平次エピソードとかそういうのはどうしましょうか……。まあ、とりあえずこれにて。

短い間ではございましたが、

お付き合いくださり誠にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4177n/>

---

仮面ライダーW Rの脅威/帰って来てくれ仮面ライダー

2011年10月6日22時28分発行